



TITLE:

賈島

AUTHOR(S):

荒井, 健

CITATION:

荒井, 健. 賈島. 中國文學報 1959, 10: 52-95

ISSUE DATE:

1959-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/176709>

RIGHT:

賈 島

荒 井 健

京都大學

古人不可見
古人琴可彈
彈爲古曲聲
如與古人聞
琴聲雖可聽
琴意誰能論
橫琴置牀頭
當午曝背眠
夢見一丈夫
嚴嚴古衣裳
登牀取之坐
調作南風絃

古人は見る事ができないが、古人の琴はひけるのだ。古曲の音色をひきだすと、古人と共に聞いているようだ。琴の音色は聞くことができて、琴の意味は誰が論じられよう。琴を横たえ枕もとに置き、ま晝に背を日にさらして眠る——夢に一人の丈夫が現れた。いかめしく古代の衣冠。ベッドにあがつて手に取って坐り、(昔の聖人が作つた)南風のしらべをかなでる。ひとたび奏すれば風雨が來り、ふたたび奏すれば雲とかすみ^{くすみ}が變化する。鳥獸はみな鳴き叫び、草木はしげりにしげる。やつと分つた、太古の時代は、遠くはない、昔にもどることはできる。その夢の中の歡喜

の時に ついて、頭では分つてゐるが口では傳へにくい——目ざめてみるとその人は消え、起き直ると涙がぼろぼろ。

一奏風雨來
再奏變雲煙
鳥獸盡嚶鳴
草木亦滋蕃
乃知太古時
未遠可追還
方彼夢中樂
心知口難傳
既覺失其人
起坐涕洟瀾

北宋時代の文學者・歐陽修(1007~1072)の解釋によれば、詩人賈島(あざなは浪仙或いは閻仙779?~843)のスタイルとは、右のようなものであつた。かれはこの作品に「賈島のスタイルにならう」と題している。(四部叢刊本「歐陽文忠公集」卷四「琴を彈ず 賈島の體に效う」)

1

唐代末期の文學者・司空圖が「王維(701~767)韋應物

(757~780)は、澄明平靜・精細緻密だが、格調がそのなかに存在する。どうして力強さをさまたげていようか。賈島にはまことに警句があるが、その全篇を見て行くと、面白味が全然不足だ。一般的に塞澁(文のはこびの難澁さ)にとよせて、始めて才能を發揮できる。やはりスタイルが完璧ではないのだ。」(王右丞・韋蘇州。澄澹精緻。格在其中。豈妨於遒舉哉。賈浪仙誠有警句。視其全篇。意思殊饒。大抵附於塞(唐文粹卷八五)澁。方可致才。亦爲體之不備也。〔四部叢刊本は塞に作る〕

「司空表聖文集」卷二「李生に與えて詩を論ずる書」)と論じて以來、「塞澁」は賈島の作品に對する定説となる。五代の後蜀の詩僧・爾鳥もまた、「李白(太白 701~762)の歌を慕い、賈島の塞澁をいやしんだ。」(蜀沙門僧爾鳥。慕李白歌。鄙賈島塞澁。〔詩話總龜「前集卷八」〕という。

賈島と同時代の詩人・孟郊(東野 751~814)にも、この塞澁の評は與えられており、「孟郊の詩は、塞澁窮僻。彫琢添削して容赦しない。眞に苦吟してからで上る。その句づくりの懸命さを觀察すれば分るだろう。」(孟郊詩。塞澁窮僻。琢削不假。眞苦吟而成。觀其句法極力可見矣。〔臨漢隱

居詩話) 賈島が孟郊と同列にならべられることは通例である。「張耒(1052~1112)はいう。『唐の末年、詩人には窮迫の人が多いようだ。たとえば孟郊・賈島の連中など、みな刻琢窮苦の言によつてすぐれていた。』」(張文潛云。唐晚年。詩人類多窮士。如孟東野賈浪仙之徒。皆以刻琢窮苦之言爲工。〔宋詩話輯佚〕上『古今詩話』)蘇軾(東坡 1036~1101)の有名な「郊寒島瘦」も、むろんこの方向の上にある。「元稹(779~831)は輕薄、白居易(樂天 772~846)は俗つばい。孟郊は寒むざむとし、賈島はやせてる。」(元輕白俗。郊寒島瘦。〔東坡集〕卷三五『柳子玉を祭る文』)

賈島は從つて孟郊と變りはなく、かれの詩には獨自性を認めることはできないのだろうか。明時代の批評家・胡應麟は、はつきりそうだという。「盧仝(？~835)と馬異、孟郊と賈島は、同一時期にならんで出、そのスタイルの酷似が大變ふしぎな上に、その名前がみな生れながらにまともな對句なのは、わけても大變ふしぎだ。」(盧仝・馬異。孟郊・賈島。並出一時。其詩體酷類。已爲奇絕。其名皆天生的對。尤爲奇絕。〔詩數〕外編四))

しかし、南宋時代の詩論家・張戒は反對意見で、「韓愈（退之768~824）は、張籍（768~830?）などについてはすべて子供扱いにしたが、ただ孟郊については口をきわめて推賞した。……世間ではかれを賈島に配して、その寒苦をいやしむが、考察不足である。孟郊の寒苦、いかにも眞實だ。だがその格調は高尚古雅、言わんとする所は精確、その才能はすぐには見つかりもせぬだろう。」（退之。于籍輩皆兒子畜之。獨于東野極口推重。……世以配賈島。而鄙其寒苦。未之察也。郊之寒苦。則信矣。然其格致高古。詞意精確。其才亦豈可易得。〔歲寒堂詩話〕卷上）と兩者を斷絶させようとする。また、同じ南宋の末期に出現した、文學批評史上の名著とされる「滄浪詩話」の、各時代の代表的な詩人のスタイルを列記した部分でも、「孟東野體」「賈浪仙體」と、兩者は獨立してあげられている。

自己の作品に物語的要素を導入することに對する興味の濃厚と稀薄。これは孟郊と賈島との分れる、まず第一の地點であろう。一つのプロットに基づいた幾分敘事詩的なジャンル・樂府は、前者の詩集中二割を占めるが、後者には

約四百篇の全作品中ただ一篇しかない。

かれらの時代、八世紀から九世紀にかけては、文學者の間に虚構熱が高まつた時期で、その頂點が「傳奇」と呼ばれる一種の短篇小説の流行だと見なされる。韓愈（毛穎傳）、柳宗元（李赤傳）、元稹（鶯鶯傳）、沈亞之（異夢錄）などのようにこの種の作品を書いている文學者についてはいうまでもないが、かれら以外でも當時の有名無名の詩人は多少とも物語的要素を取り入れて作詩している。

賈島は、當時としては、むしろ例外的な作者である。かれがフィクションに興味を持たないのは、それを創作する能力がないことを示す。かれの作品には同一表現の反復（同一テーマの反復ではない）があまりに多い。

1 毛女峰當戸 毛女の峰は戸と向きあい、日は高いが頭はまだといてない。（四部叢刊本「唐賈浪仙長江集」卷四『唐環の歎水莊に歸るを送る』以下賈島集は卷數のみを記す）

1 草合逕微微 草が閉じて小路はあるかなきか。終南山がしまつたとびらと對する。（卷四「荒齋」）

2 終南對掩扉 居所は青門里にあり、高臺は千萬の山々と

2 臺當千萬岑 向きあう。(巻六「盧秀才の南臺」)

1 掩扉當太白 しまつたとびらは太白山と向きあい、お年

2 臘數等松椿 は松や椿 (チャンチン) にも等しい。

(巻八「靈準上人の院」)

1 新起此堂開北窗 新しくこの堂が建てられ北の窓を開く

2 當窗山隔一重江 と、窓のむこうに山が一本の川をへだ
ててある。(巻九「韋雲叟の草堂に題す」)

またかれはある特定の題材に、はなはだしく執着する。

王香毓氏が「その詩のなかで常に詠ずる物は、ただせみとおろぎで、全詩にあらわれること、二十餘回。恐らくはその情感が託されてもいるのだ。」(其詩中所常詠之物、厥惟蟬與蛭、見於全詩者、不下二十餘次。殆亦其情感所寄也。〔清華中國文學會月刊〕一卷一期『讀長江集札記』)と説く通りだが、これらはいかがが想像力を縦横に驅使する型の文學者ではないことを物語る。

賈島はもと僧であり、還俗後も信仰を持ち續けていたにかかわらず、それは正面切つての教義禮讃の形であらわされず、獨語的な告白ないし自嘲をまれに發するだけである。

賈 島(荒井)

5 見僧心暫靜

6 從俗事多述

僧に會えば心はしばらく靜まり、俗人と行動すれば物事は多く行きづまる。(巻七「落第して東に歸り僧伯陽に逢う」)

7 欲別塵中苦

よくれた世俗の中の苦しみに別れたい、師父から一言下さることをお願いします。

8 願師貽一言

(巻八「竹谷上人の院に題す」)

7 自嫌雙淚下

自分がいとわしい、二筋の涙が落ちるとは、空を解する人間ではないぞ。(巻三「柏巖禪師を哭す」)

8 不是解空人

僧でもない孟郊はかえつて、「老年になろうとして佛のあしを抱き、妻に黃庭經を讀ませている。經・黃庭は小品と稱されるが、その一枚は千の明星だ。」(1 垂老抱佛脚 2 教妻讀黃經 3 經黃名小品 4 一紙千明星〔四部叢刊本「孟東野詩集」卷九「讀經」〕「始めて儒教の誤まりに驚き、ようやく大乘の教えに親しむ。」(11 始驚儒教誤 12 漸與佛乘親〔前掲書卷三「自惜」〕とまでいう。

かれには、「ただひとり暗黒の死の原理を問うのだが、先輩の儒者たちはひとたびも發言していない。」(11 獨問冥冥理 12 先儒未嘗言〔前掲書卷一〇「吳興の湯衡評事を悼む」〕か

ら、「千階建ての建物にのぼつて、天に三、四の質問をしてみた。」（1欲上千級閣2問天三四言〔前掲書卷九「昭成閣に上ること得ず 從姪僧悟空の院に於て嘆嗟す」〕という思想的煩悶があつたが、それは結局「地上一寸ばかりのつぶやさ。高き天がいかにして聞くのだろう。」（21一寸地上語22高天何由聞〔同上〕）の絶望に終らざるを得なかつた。その絶望を裏づけるものは、廣くしては社會の現實であり、狭くしては詩人の運命であつた。かれは戦死者をいたむ詩においていう。「人間は萬物にまさるとお題目みたいに言うけれど、白骨は一面に亂れ散つてゐる。どうして春の季節に死んで行く？ むらがる草が芽生えるのにも及ばないじやないか。太古の聖天子・堯や舜は天地をつかさどつたが、農具を作り武器を作らなかつた。秦や漢のやつらは國土を奪いあい、殺人には鑄造し農耕には鑄造しなかつた。天地よ金屬を産するな。金屬を産すれば人間は鬭争だ。」（徒言人最靈。白骨亂縱橫。如何當春死。不及羣草生。堯舜宰乾坤。器農不器兵。秦漢盜山岳。鑄殺不鑄耕。天地莫生金。生金人競争。〔前掲書卷一〇「國殤を弔す」〕これが現代であり、そして「古

代人は外形は野獸みたいだが、みなえらい聖人の徳を持つ。現代人は表面は人間みたいだが、野獸心理でなかなか腹が分らない。笑つても心おだやかとはかぎらぬ。泣いても悲しいとはかぎらぬ。顔つきだけの結びつきに口先だけの交わり、腹のなかにはいばらが生える。」（5古人形似獸6皆有大聖德7今人表似人8獸心安可測9雖笑未必和10雖哭未必戚11面結口頭交12肚裏生荆棘〔前掲書卷三「友を擇ぶ」〕こうした環境においては、「詩人は孤高を業として、餓死することが實際あまりに多い。」（1詩人業孤峭2餓死良已多〔前掲書卷一〇「劉言史を哭す」〕）とのなげきは、かれにとつてはいかにしても避けがたかつた。

賈島は、單に佛教についてだけではなく、一般に詩のなかで大議論を發しない、というよりも自己主張を明確にはしないから、孟郊におけるような積極的な思想性を見出すのはむづかしい。

孟郊の詩はまた、感情の起伏がきわめて明瞭である。

零落三四字

うらさびしく殘された三、四字。たちまち千

忽成千萬年

萬年はたつのだ。あの世の人は、遺作を補つ

那知冥冥客
不有補亡篇
斜月弔空壁
旅人難獨眠
一生能幾時
百慮來相煎
戚戚故交淚
幽幽長夜泉

已矣難重言
一言一潸然

このような友人の死をいたむ詩ではむろんだが、

峽稜剗日月
日月多摧輝
物皆斜仄生
鳥亦斜仄飛
潛石齒相鎖
沉魂招莫歸
恍惚清泉甲

てもらわぬとはかぎらぬが(?)。斜めにさす月が空しい壁に悲しく、旅人はただひとり眠りがたい。一生はどれだけの時間があり得よう。百の愁いは来て胸をこがす。しきりにこぼれる舊交を思ふ涙。かすかなかすかな死の世界のわき水。もうだめだ、これ以上言うのは困難だ。ひとこと言えばそのたびに泣けてくる。(前掲書卷一〇「李少府廳にて李元質の遺字を弔す」)「最終行の潸の字は汲古閣本による。四部叢刊本は潛)」

峽谷の稜角は日月を切斷し、日月はいささか輝きをくじかれる。物はみな斜めに傾むいて生じ、鳥もまた斜めに傾むいて飛ぶ。水中にひそむ石は齒がみしつつつながりあい、沈める魂は招いても歸ることがない。うつすらと見える清い泉のよろい。模様のように濃緑の岩のころも。飢えて呑みこもうとざわざわ水音は叫び、よだれをたらすようにどうどうと水量はあふらざる。峽谷の春に行つてはなら

賈 島(荒井)

班爛碧石衣
餓嚙潺湲號
涎似泓泓肥
峽春不可遊
腥草生微徵

ここでも、峽谷の情景の激烈さと等しく、かれの感情もはなはだ激烈である。

科擧すなわち官吏資格試験に落第した賈島が、たとえ

下第只空囊
如何住帝鄉
杏園啼百舌
誰醉在花傍
淚落故山遠
病來春草長
知音逢豈易
孤棹負三湘

落第、ただからの財布ばかりだ。どうして帝都に住めようか。アズズの咲く庭園にモズは鳴く。花のそばにいて酔うのは誰。涙が落ちる、ふるさとの山は遠く。病が襲う、春草は長くのびた。才能の發見者には會うのがなんと困難か。一本のかいを持つて三湘の川にわかれよう。(卷三「下第」)

と、自己の不遇を悲しんでも、同じ立場に置かれた孟郊の、「見捨てられまたも見捨てられ。感情はまるでかたな

ない。なまぐさい草がちよろちよろ生える。
(前掲書卷一〇「峽哀」十首之七)

さずのようだ。」（7 棄置復棄置 8 情如刀刃傷 「孟東野詩集」卷三「落第」）を前にすれば、その悲鳴ないし絶叫に對して、すすり泣きとも言えぬ程度に思える。賈島は大げさな身振りを極度にきらつた。

その作品の大部分が敘景詩である賈島とはちがい、孟郊は自然詩人ではない。それを別にしても、孟郊は賈島に比べてあらゆる面でアクセントの強い詩人である。たとえ不景氣な題材や面白くない心情ばかりを歌う所に共通點が見出されるとしても、兩者はスタイルを異にし、孟郊はなお陽性だが、賈島は陰の陰たるものであらう。賈島の場合と同じく、歐陽修による、孟郊のスタイルの擬作をあげておこう。

花妍兒女姿
零落一何速
竹色君子德
猗猗寒更綠
京師多名園
車馬紛馳逐

花のあでやかさは女性のすがただが、しほみ枯れるのが實に何と速かなことか。竹の色あいは君子の德。美しくまた勢よく、寒くなればさらに綠だ。都には名園が多く、車馬は至るところに走りまわる。春風に赤や紫の（花の）時、ここに青綠の透明な玉を見る。入り亂れて青いこけの上に突き出し、さやさやと

春風紅紫時

見此蒼翠玉

凌亂迸青苔

蕭疎拂華屋

森森日影閑

濯濯生意足

幸此接清賞

寧辭薦芳醪

黃昏人去鎖空廊

枝上月明春鳥宿

2

華麗な家屋にふれる。こんもりとして日光を靜かに受け、樂しげに生命力は充實している。さいわいにもこの清興を手にしたのだ。どうして芳香の酒をすすめられて辭退するものか。たそがれに人は去り空しい回廊はとざされ。枝の上には月が明るく、春の鳥が止まつている。（「歐陽文忠公集」卷六「刑部にて竹を看る 孟郊の體に效う」）

司空圖以下の蹇澁說到眞向から反論を加えるのは、南宋末期に、詩話「深雪偶談」をあらわした方嶽である。「賈島は、燕（いまの河北省）の人。酷寒の地に生まれた。だから心の持ち方もその通りだ。實際才力氣勢にまかせて、性情を没却してしまおうとはしない。特に事物の原理のすがたについては、毛すじほどもしつかと認識する。……

その全集となると、歲月をかけ年期を入れ、深く味わい細かくたぐれば、草木の茂りあつた香氣のようで、やせたなかに秀麗な文脈が隠れ、次第にその妙味が現われてくる。

……司空圖は、後輩であり、元來賈島の原動力を利用しながら、逆に賈島を寒澁にことよせなければ才能を發揮する餘地がないとし、蘇軾はよく考えず、同様にかれの言葉に賛成した。これこそ、道に反いた人間ではないか。でなければ奴隸というのは不熱心なものゆえ、かれらの文も手當り次第のつめこみなのだ(?)。私は賈島に歸依・敬禮することやはり絶對だ。」(賈閨仙。燕人。産苦寒地。故立心亦然。

誠不欲以才力氣勢掩奪情性。特於事物理態。豪忽體認。……至而其全集。經歲踰紀。沉咀細繹。如芋葱佳氣。瘦隱秀脈。徐露其妙。……司空表聖。後輩也。本用其機。反以閨仙非附寒澁無所置才。坡公不細考。亦然其言。獨非叛逆者歟。不然則隸者不力。其文擠而實。予則歸敬閨仙也亦至矣。)

方嶽は平靜な淡泊なそして自然な情感の發露を詩の最上とする。かれは唐詩、特に奔放であつたり極端に走らぬそれを尊重し、宋代の詩人は議論が好きだが唐代の詩人が性

情を主とするのに及ばないと考えた。陶淵明(365~427)

——韋應物・柳宗元(773~819)——蘇軾を詩文學の正道だと主張したかれの激賞する賈島がこの系列の外にある詩人と意識されるはずはない。

韋應物・柳宗元は、王維・孟浩然(689~740)と共に、王孟韋柳と呼ばれる唐代の代表的自然詩人だが、賈島はかれらと同じ性格の詩人だと明言する批評家は方嶽以前にもあつた。「詩を作つて……清澄深遠・閑寂淡泊を欲するなら、韋應物・柳宗元・孟浩然・王維・賈島を讀むべきだ。」

(爲詩……欲清深閑淡。當看韋蘇州・柳子厚・孟浩然・王摩詰・賈長江。〔雪浪齋日記〕「詩人玉屑」卷一二「評鮑謝諸詩」條所引)そして陶淵明と賈島との結びつきについても、死後まもなく蘇絳によつて書かれた賈島の墓誌銘にはすでに記されていた。「あらわす所の文章は、新奇な文句やきれいさに氣をとめず、淡淡として陶淵明・謝靈運(385~433)の足跡に従い、ちぎれ雲・一羽の鶴そのままに、超然と世俗の外を歩んだ。」(所著文篇。不以新句綺靡爲意。淡然躡陶謝之蹤。片雲獨鶴。高步塵表。〔全唐文〕卷七六三「賈司倉墓誌銘」)

田園における平凡な日常生活にも喜びを見出し、同時に人生の幸福について深い思索をかさねた哲學詩人として、幅は廣く複雑ではあるが顯著な傾向性を持つ淵明と、傾向性のないのが特徴だとさえ言えそうな賈島。蘇絳の論旨は果して受け入れられるものなのか。兩者を秋の詩によつて比べてみよう。

秋菊有佳色

裊露擿其英
汎此忘憂物
遠我遺世情
一觴雖獨進
杯盡壺自傾
日入羣動息
歸鳥趨林鳴
嘯傲東軒下
聊復得此生

北門楊柳葉

秋、菊はうつくしい色をして咲いている。しつとりと露に濡れたその花片はなぢらを摘み、この「憂い^{うれひ}を忘るる物」といわれる酒の上にかべてのむと、世俗を遠ざかつた私の氣持は、更にぐつと深まる。さかずきはたつた一つ、獨酌であふつているのだが、飲みほし飲みほし、壺もいっしか残りすくな。日が西の山に落ちてもろもろのざわめきもやみ、時に歸る鳥が林をめざしつづつ鳴いて渡る。部屋ふしの東のきの下で、ふうーつと身も心もほぐしたような氣持になる時、何とかますます今日も生きえたのだ、と心にしめる。(一海知義注「陶淵明」四八ページ『飲酒』二十首之七)

北門のやなぎの葉は、知らぬまにもはやひら

不覺已繽紛
值鶴因臨水
迎僧忽背雲
白鬚相並出
暗淚兩行分
默默空朝夕
苦吟誰喜聞

ひらし始めた。鶴を見かけたので、ひよつくり水ぎわに出た。僧を迎えて、急に雲に背を向けた。白いひげが相並んで生え、暗涙がふた筋に分れる。黙々として朝夕は空しい。苦しげな歌聲はだれが喜んで聞こう。(卷四「秋の暮」)

苦吟誰喜聞

前者の單純素朴の表現のなかにも存在する豊かな美感、餘裕ある態度、それは後者には見られず、およそ餘韻といふものがかける。賈島の作品中にも淵明への言及はあるが、文學的傾倒を示す言葉では別にない。「不以新句綺靡爲意」だけで兩者の類似を説こうとするのは、あまりに根據薄弱と言わねばならない。(六朝時代隨一の華麗で音樂的な山水詩人・謝靈運については言及するまでもあるまい。)

王維は何としても盛唐(710~765 唐詩の黃金時代)の詩人である。

單車欲問邊
屬國過居延

かつての蘇武のように單身邊境を訪れんとし、邊地の官吏たる自分は、居延國を通りす

征蓬出漢塞
歸鴈入胡天
大漠孤煙直
長河落日圓
蕭關逢候騎
都護在燕然

ざる。風のままに轉^{まわ}り飛^とぶ蓬^{ほう}のとき身は、ここに漢のとりでを出で、仰げば北へ歸る雁は、胡^この空へと飛びゆく。果てしない大沙漠には、狼火がひとすじ高く立ちのぼり、どこまでも流れてゆく河の彼方に、沈みゆく日がまるい。蕭關で物見の騎馬に出會い、様子を尋ねると、わが目指す都護の將軍は、今やはるか燕然山のほとりにおられるということだ。
(都留春雄注「王維」九七ページ『使して塞上に至る』)

この重厚な雄壯さは賈島にはない。王維の詩は、どこまでも素直であり、すくすくと伸びた、林庚氏のいわゆるオブティミスティックで生命力にみちた青春の心情があふれている。「中國文學簡史」上卷二五九ページ以下)

李長之氏は、王維の五言絶句五篇をあげて

秋山斂餘照
飛鳥逐前侶
彩翠時分明
夕嵐無處所

秋の山の夕映えは、おさまり、鳥は、友を追つて飛びゆく。時時、はなやいだ山のみどりが、くつきりして、夕もやのかかるころがない。(都留春雄注「王維」四六ページ『本蘭柴』)

賈 島 (荒井)

颯颯秋雨中
淺淺石溜瀉
跳波自相潑
白鷺鷥復下

木末芙蓉花
山中發紅萼
澗戶寂無人
紛紛開且落

人間桂花落
夜靜春山空
月出驚山鳥
時鳴春澗中

春池深且廣
會待輕舟迴
靡靡綠萍合
垂楊掃復開

颯颯と音たてて降る秋の雨の中を、岩瀬の流れが、淺淺と奔^はり下つている。跳^はる波は、無心にしぶきをあげるのに、白鷺^{しらぎ}は、驚いて飛びたち、また舞い下りた。(前掲書五五ページ「樂家瀬」)

こずえの芙蓉^{ふよう}にも見まがう辛夷^{こうい}の花が、山中に紅いはなびらをひらいた。谷川近くの家の戸口は、ひっそりして人のけはいもない。花が、ただ咲き亂れ、また散り亂れるにまかされている。(前掲書六二ページ「辛夷塙」)

人は、のんびり閑^{ひま}な生活、もくせいの花が散っている。靜かな夜で、春の山は、ひっそりしている。やがて、とほうもなく明るい月が上つて、山鳥を驚かし、驚いた鳥は、時時春の谷川で鳴いている。(前掲書三一ページ「鳥鳴澗」)

深くて廣い春の池は、輕ろやかな舟がめぐつてくれるのを待つているにちがいない。なよやかに美しい緑のうき草は、池の面^{おもて}をおおいとじ、しだれ柳が、それを掃いてまた開こうとする。(前掲書三三ページ「萍池」)

言う。「すべて見事に靜的事物を寫生した風景畫である。

……そればかりでなくかれはしばしば一種の突然の動態——飛鳥落花などのような——によつて、進んでかれの描いた世界の靜寂と對照させる。」（中國文學史略稿」第二卷九八ページ）

靜寂を描く點では、賈島の自然詩も全く同様である。

一枝青竹傍

一本の青竹のさお、すいすい緑の浮き草のなか。魚を釣る人は見え、次第に秋の池の水に入つてゆく。（卷八「昆明池にて舟を泛ぶ」）

不見釣魚人

漸入秋塘水

この詩などはまさに閑寂淡泊、王維の詩境と差がない。

だが等しく靜寂を基調としたこの詩人が、その作品のなかにさらに發展させる世界は、王維のそれとは、完全に對立的な様相を呈して來る。

已知歸白閣

山遠晚晴看

石室人心靜

冰潭月影殘

とつくに知つて、君が白閣峰に歸つたと。その山は遠く、夕暮れの晴れ間に見えている。岩の居室に人の心は靜か。氷のふちに月光は碎ける。かすかな雲がひとひらちぎれて消え失せる。古い木は小枝を落すが乾ききつた。

微雲分片滅

古木落薪乾

後夜誰聞磬

西峰絕頂寒

明け方近い夜にだれが磬の音を聞くだろう。西方の峰の、絶頂は寒い。（卷三「白閣の默公に寄す」）

僻寺多高樹

涼天憶重遊

磬過溝水盡

月入草堂秋

穴蟻苔痕靜

藏蟬柏葉稠

名山思徧往

早晚到嵩丘

邊鄙な寺は高い樹が多かつた。涼しい天氣には度重なる遊覽を思い起す。磬の音は水路を過ぎて消える。月は草堂に入つて秋だ。アリの穴を開きこけのあとは靜か。セミをかくして柏（ヒノキ）の葉は密生する。名山はどこでも行こうと思う。いつになつたら嵩山に到着するだろう。（卷三「無可上人に寄す」）

羈旅復經冬

瓢空盎亦空

淚流寒枕上

跡絕舊山中

旅先ぎでまたしても冬を越す。ふくべはから鉢もから。涙は寒むぎむした枕の上に流れる。足跡はふるさとの山の中に残っていない。厚水が水草を浮べた水を凍結させ、雪は柳を枯らす風にまざる。曉の光、にわとりはまだ時

凌結浮萍水

を告げない。噯喉と二三羽のがんが鳴く。

雪和袁柳風

(卷四「冬の夜」)

曙光雞未報

噯喉兩三鴻

客愁何併起

暮送故人回

廢館秋螢出

空城寒雨來

夕陽瓢白露

樹影掃青苔

獨坐離容慘

孤燈照不開

旅人の憂愁はなぜいつときに起るのか。夕暮れになじみの友の歸りを送つたから。荒れ果てた旅住居に秋のホタルが出る。さびしい城に寒むざむした雨が来る。夕陽は白い露にきらめく。樹影は青いこけをかすめる。ひとり坐ると別離のすがたがいたましく、ただひとつのともし火に照らされても顔はほころびない。(卷五「泥陽の館」)

王維の「木蘭柴」「辛夷塢」は情景自體に動きはないが、

作者——讀者の精神の凍結を豫想させ・強要するものではなかつた。「欒家瀨」に至つては明かに躍動的である。かれの詩が澄みきつた秋の水面ならば、賈島の詩は堅く結ばれた氷の塊なのだ。「黄昏と秋は傳統詩人の時間と季節、

だがかかれは深夜を愛すること黄昏に過ぎ、冬を愛すること秋に過ぎた。」(聞一多「唐詩雜論」所收「賈島」。以下このすぐれた評論に負う所は多い。なお、王維と詩風の近似する孟浩然は省略する。)

王維よりさらに清澄かも知れないが、韋應物の詩は、

存亡三十載
事過悉成空
不惜露衣淚
併話一宵中
生きるか死ぬかの三十年間。事が過ぎ去つてみるとすべては空しかつた。着物をぬらすほど涙を惜しまず、すべて一夜のうちに話そう。(吳興凌氏朱墨套印本「韋蘇州集」卷六「舊を話す」)

雨歇見青山
落日照林園
山多煙鳥亂
林清風景翻
提攜唯子弟
蕭散在琴言
同遊不同意
耿耿獨傷魂
雨がやみ青い山が見え、落日は森のなかの庭園を照らす。山では盛んに夕もやと鳥が入り亂れ、森では清らかに風と光がゆれ動く。手をたずさえるのはただ子供たち。さつぱりとした心持ちは琴歌によせる。共に遊んでも意志は同じでなく、ずきりずきりとひとり魂を傷めている。さびしく、鐘はもはや鳴り終つた。どうして家へ歸れるものか。(前掲書卷六「林園晚霽」)

寂寞鐘已盡
如何還入門

庭樹轉蕭蕭

陰虫還戚戚

獨向高齋眠

夜聞寒雨滴

微風時動牖

殘燈尙留壁

惆悵平生懷

偏來委今夕

庭の樹木はますますさびしげだが、秋の虫はなおいしきに鳴く。ただひとり閑靜な書齋に眠り、よる寒むさむした雨のしたたるのを聞く。微風が時おり窓を動かし、消えかけたとももし火がまだ壁わきに残る。面白くない平生の思いが、あやにくにやつて來て今夜積み重なる。(前掲書卷六「秋の夜」二首之一)

いささか線が細いようである。「秋の夜」の第三・四句に對して、「自分は韋應物の詩を讀み、ここまで來て、初めてその詩が女性的なのを不審に思う。」(吾讀蘇州詩。至此。初怪其詩近婦人。〔劉辰翁批〕)という評が出るのもそのためであらう。しかし、その端正ななかに暖か味のこもつた情感は、第一行から最終行までを貫ぬく流動性に支えられて快い抒情をかたちづくる。北宋時代の詩人・徐俯(一一〇七—一一二〇)

はいう。「李白・杜甫以來、古人の詩法はすべて了たれた。ただ韋應物だけは六朝時代の風致を持ち、最も流麗である。」(自李杜以來。古人詩法盡廢。惟蘇州有六朝風致。最爲流麗。〔呂氏童蒙訓〕「詩人玉屑」卷一五『韋詩流麗』條所引)

これに對して賈島の作品は

曲江春水滿

北岸掩柴關

祇有僧隣舍

全無物映山

樹陰終日掃

藥債隔年還

猶記聽琴夜

寒燈竹屋間

寂寥思隱者

孤燭坐秋霖

梨栗猿喜熟

雲山僧說深

曲江は春の水がみち、北の岸に柴の戸が閉じられている。ただ僧が家を隣に持つばかり。全く山と相映する物はない。木陰は終日掃く。藥の借金は何年か置いて返す。まだ覺えている、琴を聞いた夜の、寒むさむしたともし火、竹の家の一とまを。(卷四「錢庶子に寄す」)

さびしく隱者を思いながら、ただ一つのとしびのもとで秋の長雨に對坐する。ナシとクリ、サルは熟したと喜ぶ。雲と山、僧は深いのを樂しむ。手紙をこつつけてもきつと届くまい。仲間を作つて共に尋ねたいものだ。眠

寄書應不到

結伴擬同尋

廢寢方終夕

迢迢紫閣心

らずにいたが今ちようど夜が明けようとする。
はるかにはるかに紫閣峰にはせる心。(巻四
「紫閣の隱者を懷う」)

抒情詩にまちがいないのだが、一向にリリカルではない。
かれは友人を思ふ肝心のテーマを忘れ、陰氣な枯死的風物
を描く方に熱中しているように見える。次に韋應物・賈島
の兩者が花鳥を詠じた作品を並べておこう。

朝紅爭景新

夕素含露翻

妍姿如有意

流芳復滿園

單棲守遠都

永日掩重門

不與花爲偶

終遣與誰言

求魚未得食

朝のくれないは日光と争うほど新鮮。夕べの
白さは露を含んでひるがえる。あでやかな姿
は心を寄せるように。流れでる芳香がまた庭
園にみちみちる。獨り身で遠隔の都をあずか
り、永い一日も何重かの門を閉じる。花と相
手にならなければ、一體誰と言葉をかわすの
だ。(「韋蘇州集」卷八「雜花に對す」)

魚を求めてまだ食物にありつかず、砂濱を行

賈 島 (荒井)

沙岸往來行

島月獨棲影

莫天寒過聲

墮巢因木折

失侶遇弦驚

頻向煙霄望

吾知爾去程

きつ戻りつ歩いている。島に出た月にひとり
ねぐらにつく影が浮かび、日暮れの天に寒む
さむとして過ぎゆく鳴き聲が聞える。巢から
落ちたのは木が折れたから。連れをなくした
のは弓弦に驚いたので。しきりにかすんだ天
空を望んでいる。私はお前の行く旅程が分つ
た。(巻八「鷺鷥」)

韋應物と共に、柳宗元は唐代ではもつとも陶淵明に近い

とされるが、同様な靜的境地と思われる詩でも、

久爲簪組累

幸此南夷謫

閑依農圃鄰

偶似山林客

曉耕翻露草

夜榜響溪石

來往不逢人

長歌楚天碧

私はひさしく官吏の生活にわずらわされてい
た。このえびすの地に流されたのは、しあわ
せでなくて何だろう。農家の人と隣あわせに
住むのは心のどかで、ふと山林の自由な身
のような氣もする。早朝から耕作に出て、つゆ
がおりました草地をすきかえし、夜は船のかいの
音が谷川の石をひびかせる。ゆきつもど
りつ、だれにも出あわない。私は長く聲をひい
て歌う、楚の國のふかい青空に向つて。(小
川環樹「唐詩概説」七三ページ『溪居』)

柳宗元らの一派がくわだてた政治改革が失敗し、政敵の手でかたいたなかに流された悲憤を、いあわせと逆説的に表わしている通り、その複雑さと深刻さにおいて、韋應物よりはるかに陶淵明的である。「柳宗元の詩はとりわけ深遠で分りにくい。……私はかつて人に『柳の詩のどこがいのか。』と尋ねたが、『まあどこもかしこもいい。』と答え、さらに『君はどの個所が好きだ。』と尋ねると、「好きでない個所はない。』と答えた。で、分つてやしないのだと知つた。」（子厚之詩。尤深遠難識。……余嘗問人。柳詩何好。答云。大體皆好。又問君愛何處。答云。無不愛者。便知不曉矣。〔宋詩話輯佚〕卷上『潛溪詩眼』）という話があるほどで、その敘景詩は、

- 1 界園匯湘曲
- 2 青壁環澄流
- 3 懸泉榮成簾
- 4 羅注無時休
- 5 韻聲叩凝碧
- 6 鏘鏘徹巖幽

界園は湘江の流れのおちあう所。青々した壁が澄んだ流れに取りまかれてゐる。空にかかる泉は粲然としてすだれを作り、水の薄絹の注ぐのは休む時がない。（落下する水は）ひびき渡る聲となつて凝固した濃緑（の瀧壺）をたたき、鏘鏘として絶壁の奥深く通る。眞赤な夕焼けがその頂上にかぶされば、虚空に舞い遊ぶことを空想する。

7 丹霞冠其顛 靈境は形容することができぬ。超自然の技巧はまことに探求しにくい。たちまち玉帝のもとに参内し、天の冠の前に玉飾りを垂らしたようになる。（四部叢刊本「柳先生集」卷四二「界園巖の水簾」）

8 想像凌虛游

9 靈境不可狀

10 鬼工諒難求

11 忽如朝玉皇

12 天冕垂前旒

より構成的であり、豊富な量感に支えられた壯麗な世界が築き上げられる。

賈島の「賀蘭朋吉に寄す」る詩（卷三）は、

- 1 往往東林下 往々にして東林寺のあたりは、花の香が火
- 2 花香似火焚 のようにもえる。

と、かれの詩集中恐らく最高のはなやかな一聯に始まるが、

- 3 故園從小別 故郷の園には小さい頃から別れ、夜の雨が
- 4 夜雨近秋聞 秋らしさを加えて聞こえている。野菜は寒
- 5 野菜連寒水 むぎむした水に連なり、枯れた切りかぶは
- 6 枯株簇古墳 古い墓場にむらがる。

と續けられるにつれ、次第に暗い影におおわれて行く。

「かれは靜を愛し、瘦を愛し、……冷を愛し、貧を、病を、醜とそして恐怖を愛するまでに至る。」（聞一多）

5 秋聲依樹色
秋のけはいは木々の色どりにまとう。月影はがまの根もとに存在する。（卷三「南池」）

6 月影在蒲根
岩のすきまは枯れ草をくわえる。水に浮かぶ木の根にはきれいなこけがはう。（卷四「李甘の原居を訪る」「上淨は瀆古にも作る」）

3 石縫銜枯草
4 查根上淨苔
荒れた建物は、こけが敷き石にねばりつく。奥深い茂みは、實がハシバミの木から落ちる。（卷四「劉華の書齋に題す」）

5 荒樹苔膠砌
6 幽叢果墮榛
歸宅する役人が夜の鍵をかけ、はい進むへびは古いきりの木に入る。（卷五「長江に題す」）

3 歸吏封宵鑰
4 行蛇入古桐
5 棲鳥櫻花上
6 聲鍾磔閑間
いこえる鳥はシユロの花の上。音を立てる鐘は小石作りの建物の間。（卷六「獨孤馬の二秀才明月山に居りて讀書するを送る」）

3 螢從枯樹出
ホタルが枯れ木から出、コオロギがこわれた階段にかくれる。（卷七「胡遇に寄す」）

4 蛩入破堦藏
3 石泉流出谷
4 山雨滴栖鷗
岩にわく泉は流れて谷を出、山に降る雨はねぐらのフクロウにしたたる。（卷七「成湘林下に宿る」）「流出は出幽にも作る」

5 濕苔粘樹瘦
6 瀑布濺房菴
じつとりしたこけが樹のこぶにねばりつく。瀑布が小さいおりにしぶきかかる。（卷八「魏少府に寄す」）

3 籬落鏐間寒蟹過
4 莓苔石上晚蛩行
かきねの割れ目に貧弱なカニがはい、こけむした岩の上に日暮れのコオロギが動く。（卷九「慈恩寺の文郁上人に酬ゆ」）

「以上のこうした趣味は、實際過去の詩人も偶然ふれてはいたが、今のように大量に、徹底的に發掘されたことはなかつた……。」（聞一多）

「王維の詩を味わえば、詩中に畫あり。」と稱されるが、

ここには色彩的なまた繪畫的な何物も存在しない。ただ微小な・病的な對象への、異常な執着があるのみ。賈島の主觀における自然美はもはや通常の意味での美ではなく、むしろ醜としか呼ばれえぬものであり、同時にかれの自然美はスポット・ライトによつて照らし出された一個の點である。圖式的に言えば、韋應物のそれは線であり、王維のそれは面であり、そして柳宗元のそれには立體感が加わる。

司空圖が王維や韋應物と賈島との間に一線を畫そうとしたことには同意すべきである。ただしかれは賈島にはより低い評價しか與えない。方嶽がそこで義憤を發したわけだが、實は、賈島を王孟韋柳との比較において論ずること自体が、幾分かの眞實をふくみつつも根底的にはあやまつていたので——それは孟郊とかれの場合も同様であり、この一見スケールの小さな詩人が、案外複雑な要素を持つことを物語っている——かれが唐代の詩人の系譜中に占めるべき位置は別にあつたのだ。

3

九世紀前半の詩壇には、孟郊・盧仝・劉叉・韓愈等の世道人心への惡罵が響き、白居易・元稹・張籍・王建等の社會改良の旗印が高く掲げられているが、「同時にはるかなた、古びた禪寺或いは小さな町の役所で、賈島・姚合が一群の青年をひきいて……詩を作つて」（聞一多）いたことは無視できぬ事實である。

元和十一年(816)に科擧に合格した姚合は、その三年ばかり前から長安へ來て受験生活に入つており、同じころ科擧を目ざし始めた賈島を知るようになったと推測される。姚合・賈島グループの芽ばえはここに生じたわけである。

この集團に屬する詩人は、交友關係の存在を示す作品から推定すると、少くとも以下の十二人がかぞえられる。(附表参照)

姚 合 (775~855)	馬 戴 (775~ ?)
周 賀 (777~ ?)	賈 島 (779?~843)
李 廓 (783~850?)	顧非熊 (796~854?)

B A	姚合	賈島	無可	馬戴	周賀	李廓	顧非熊	朱慶餘	劉得仁	雍陶	厲玄	喻龜
姚合		13(1)	7	2		3	1(1)	2	(1)	3	3	2
賈島	12		6	2		2	1(1)	2		3	2	
無可	8(4)	3		1		1					2(2)	1
馬戴	5	6	2(1)			2	1(1)				1	
周賀	4(1)	1(1)						2(3)			1	
李廓												
顧非熊	1	(1)	2	1		1					1	1
朱慶餘	2	2	1				2					
劉得仁	2(1)	(1)	2				2			4	2	
雍陶		1	3			1						
厲玄							1					
喻龜	1	1	1									

朱慶餘 (797~?)
 雍陶 (805~?)
 無可 (?)
 劉得仁 (799~?)
 厲玄 (?)
 喻龜 (?)

A 欄は作詩者。B 欄はその詩によつて作者との交友関係の判明する人物。

數字は贈答・哀傷その他交友の確證となる作品を示す。

() は疑問のあるもの。

かれらの社會的地位はおおむね低く、大部分は中級の官僚で、頭株の姚合でも、秘書監(宮中の圖書掛の長)の閑職に終り、政治的には無力であつた。科擧合格時の年齢から見ても、朱慶餘・雍陶の三十歳は早い方で、李廓三十六歳、姚合四十一歳、顧非熊五十歳、馬戴に至つては七十歳。そして周賀・賈島・劉得仁は最後までパスできなかつた。長期にわたる精神的物質的兩面の困苦。グループの雰囲気は想像にかたくない。一般社會と隔絶した世界に住む僧や隱者などに與えた作は數多いし、かれら自身、無可が僧であるのはもちろん、周賀・賈島もとは僧である。

全員が一堂に會することはなかつたとしても、かれらはいずれも姚合・賈島の共通の友人であり、姚合が中央の官吏或いは首都付近の地方官に在任しているときは、おりおりそのもとに集まつては談論風發。詩作が試みられたことはいうまでもない。

宵清月復圓 夜はすがすがしく月はまだ圓くなつた。共に
 共集侍臣筵 侍御史の官の宴席に集まる。自分はひとり儒
 獨寡區中學 學にくらいので、空しく佛學を論ずるばかり

空論樹下禪
風多秋晚竹
雲盡夜深天
此會東西去
堪愁又隔年

だ。風は秋も末の竹をさわがせ、雲は夜ふけの天に消えた。この會合で東西に去り、愁いを押えてまたもや何年かへだてられるのだ。(同文書局本「以下同じ」)「全唐詩」卷二九無可「秋の暮に諸文士と集い姚端公の居る所に宿る」

7 此會偏相語
8 曾同雪夜吟

この會合では話し合うばかりだが、かつて雪の夜の吟詠を共にした。(前掲書卷二一・馬戴「集いて姚侍御の宅に宿り永樂の宰殷侍御を懷う」)

1 莫厭通宵坐
2 貧中會聚難
7 開門各有事
8 非不惜餘歡

いとわしく思うなよ、夜通し起きてるのを。貧乏のなかで會合はむずかしい。……門を開けばおのおのの仕事がある、残り少い樂しみを惜しまないのじやないんだが。(前掲書卷一九・朱慶餘「賈島顧非熊無可上人と萬年の姚少府の宅に宿る」)

その他の詩人同志でもむろん往來があつた。(たとえば姚合に「厲玄侍御の無可上人と會宿して寄せらるるに和す」〔四部叢刊本「姚少監詩集」卷九〕の詩がある)

結合の軸となつた姚合は、その「性、酒をたしなみ花を

愛し、じだらくで、人間關係や暮し向きは、ほとんど氣にせず、達人の太つ腹さがあつた。」(性嗜酒愛花。頽然自放。

人事生理。略不介意。有達人之大觀。〔唐才子傳〕卷六)と評されており、そのせいか大變顔の廣い人物で、著名人にも知合いが多い。また賈島は、韓愈およびその周圍の人々とは、特別の關係にある。が、それ以外のメンバーの文學的な交友は、ほとんどかれら相互間にかざられていた。このころの大家中家たち(韓愈、白居易をはじめ、柳宗元、劉禹錫、元稹、盧仝、劉叉、張籍、王建、李賀、やや時代が降つて杜牧、李商隱、溫庭筠、許渾、等)はグループの各人と個別的な交渉が全くなかつたわけではないが、そのなかのだれ一人として、グループ全體と親しく交際していた形跡はない。かれらの團結はなかなか強固であつたと考えられる。

1 腹是羣書笥
2 官爲六義師
5 有句同人伏
6 無私胄子知

腹は群書の本箱であり、官は詩經學の教授である。……詩句ができると同人は感服し、えこひいきのないことは學生が知つている。(全唐詩)卷二〇・劉得仁「雍陶博士に贈る」

世話になつていた韓愈をはじめ、孟郊・劉叉ともに、賈

島にとつては、友人というより敬服していた先輩である。自分と同年輩以下の詩人ばかりのこの集まりは、大變親しみやすかつた。

19 會須過縣去

必らず君の町へ行くつもりだ。ましてたびたび招待されてるからには。(卷四「武功の姚主簿に寄す」)

20 況是屢招摠

の姚主簿に寄す

1 今朝笑語同

けさ談笑を共にする。幾日百愛のうちにあっただらう。(卷七「雍陶の至るを喜ぶ」)

2 幾日百愛中

かれは姚合だけには賞讃「ひとたび長江のほとりでの作を開けば、みたび起きあがつて月光のなかに吟じる。」(5)

一披江上作6三起月中吟(卷五「姚郎中の杭州より廻るを喜ぶ」)を贈るが、他のメンバーの詩は取り立てて論じていない。

賈島はこの集團内で影響を與える側にあり、その逆ではなかつたのだ。姚合がかれの人と作品に感服していた「君を思えば寝につきがたい。もしびは消えまた星も沈んだ。」

(7懷君難就寢8燭滅復星沈「姚少監詩集」卷三「洛下の夜會

賈島に寄す」)「家の貧しさはただ私が等しく、詩の好さは

一體だれが知ろう。」(3家貧唯我並4詩好復誰知同上「賈島

に寄す」のをはじめ、後年、「賈島が無可を愛したのも、

まつたく數句の詩による。」(1賈島憐無可2都緣數句詩「全

唐詩」卷二六・杜荀鶴「秋詩僧の雲英の房に宿り因つて贈る」)

と歌われた無可や、「賈島のスタイルで作詩し、あるとき

中書舍人・杜牧にお目通りしようとして會えず、そこで

『私の詩ははでおしろい、氣がない、賣りこめぬのは當然

だ。』(體閑仙爲詩。嘗調杜紫微不遇。乃曰。我詩無羅綺鉛粉。宜

其不售。「唐詩紀事」卷三一「喻龜」所引「北夢瑣言」)といつ

た喻龜の話などは、それを裏書きしている。

同時代の、他の流派の詩人たちのように、視野が廣くは

なく、一種の暗い感じのする五言律詩のみに専念するのが、

姚合・賈島グループに共通の特色である。ただし、馬戴は、

壯麗な調子の盛唐風の詩の禮讃者・嚴羽の「滄浪詩話」

「詩評」に、かれは「晚唐(836~907)唐詩の終末期」の諸

詩人の上にある。」(馬戴在晚唐諸人上)とされる詩人で、ほ

ぼ同じ立場から、清時代の學者・紀昀(1724~1805)も、「晚

唐の詩人で、馬戴は格調がもつとも高い。單に世に稱せら

れる『サルは洞庭の樹木に鳴き、人は木蘭づくりの舟にい

る。』……の句だけではない。」(晩唐詩人。馬戴骨格最高。不但世間所稱猿啼洞庭樹。人在木蘭舟。……之句也。〔藏奎律髓刊

誤〕卷二九・馬戴『落日悵望』批) という。また朱慶餘は「水部郎中・張籍にめぐり會つて認められた。」(遇水部郎

中張籍知音。〔唐詩紀事〕卷四六) と記され、その詩もむしろ張籍に近い。この兩者は例外である。雍陶は五言律詩が少

く、七言絶句が半数を占め、太和三年(833)に故郷の蜀へ南詔の軍隊が侵入して多くの婦人が掠奪された事件を悲し

んだ五篇の七絶(蜀人 南蠻の俘虜となるを哀しむ)五章) が代表作とされ、やはり毛色の變つた作者のようではあるが、

かれの詩集は十三世紀にはすでにその半ばが失われており、^④現存の作品がごくわずかである李廓・厲玄とともに、確實

な所は分らない。

五言律詩が作品の大半を占め、それほど個性的ではないけれども、この派の特色をよくあらわしているのは、顧非

熊・無可・喻臆・劉得仁・周賀等であらう。顧非熊は、たとえば「早秋の雨の夕」(「全唐詩」卷一九)に見られる通り、

表現はまだ比較的なめらかで情感も率直だが、無可を経て

喻臆の詩へと、より靜寂・より細密に、陰氣な冷やかさが増して来る。

修修復霞裳

黃葉此時飛

隱几客吟斷

鄰房僧話稀

鵲寒棲樹定

螢濕在窗微

卽事瀟湘渚

漁翁披草衣

パラパラとまたしとと。黄ばんだ葉はこの時において飛ぶ。机にもたれて旅人の吟詠は斷え、鄰室に僧の話し聲はまただ。ハトは寒むそうに樹のねぐらで動かず、ホタルはしつとりとして窓邊にかすか。瀟・湘の川のかなかに暮し、漁夫となつてみのを着よう(?)。〔「全唐詩」卷二〇・喻臆『寺居秋日雨に對して懷あり』

劉得仁は九世紀後半すでに賈島と並稱され、「賈島・無可・劉德仁などは、ときにはすぐれた境地をものにし、」

(浪仙無可劉德仁輩。時得佳致。〔司空表聖文集〕卷一「王駕に與えて詩を論ず」) 周賀もまた、十世紀後半には、「詩の格

調は清雅で、賈島・無可上人と名聲はひとしかつた。」(詩格清雅。與賈長江無可上人齊名。〔唐摭言〕卷一〇『海敘不遇』)

と稱されている。

5 刻骨搜新句

6 無人憫白衣

骨をきざむ思いで新しい句をさがすが、無官の白服を着た私を憐れむ人はいない。
〔全唐詩〕卷二〇『陳情 知己に上る』

1 詩人中最屈

2 無與使君儔

詩人中もつとも屈辱多く、閣下とお仲間にはなれません。(同上)『江夏の虞使君に贈る』

となげく劉得仁は、グループの心情を代辯し、周賀は、

その「柏巖禪師を哭す」^⑤の詩

林逋西風急

松枝講法餘

凍鬚亡夜刺

遺偈病時書

地燥焚身後

堂空著影初

此時頻下淚

曾宿到吾廬

もりの小道は西風が急。松の枝は佛法を講じたなごり。凍つたひげはなくなられた夜にそり、辭世の作は病中に書かれた。地面の乾燥はお體を焼いたあと。堂の空虚なこと、肖像を掛けたときに初めて。このときしきりに涙が落ちる。一度は我がいおりに泊られたものを。

が賈島の同題の作と相ゆぜらずとして評判になつたと、

「唐摭言」(卷一〇「海叙不遇」)に記されるが、それ以外の

賈 島 (荒井)

作品においても、かれは著しく賈島に近接する。

5 果落纖萍散

6 龜行細草開

木の實が落ちてこまかな水草は散り、カメが進んで細い草は開く。(全唐詩)卷一九『何氏の池亭に題す』

5 飢鼠絕危壁

6 寒狸出壞墳

飢えた野ネズミは高い壁を傳い、貧相なタヌキは崩れた墓地を出る。(同上)『僧の江南に歸るを送る』

賈島の詩はグループの最右翼で、上述の作風が集約的にあらわれているが、特に五言律詩の中樞をなす二組の對句においては、周到に技巧がこらされる。

(1) 假對 (或いは借對)

「作詩家には假借の對句があるが、もともと意識的なものではない。創作過程で偶然そうなつたのを、そのまま使用したのだ。……ところが晩唐の諸詩人は、進んで獨立の二格式とした。賈島の『卷簾黃葉落。開戶子規啼』(紫と同音の子の字を借りた)……が例で、假對をまともな對句にまさるとし、それを高手と考えた。」(詩家有假對。本非用意。蓋造語適到。因以用之。……而晚唐諸人。遂立以爲格。賈島卷簾黃葉落。開戶子規啼。……爲例。以爲假對勝的對。謂之高手。『宋詩話輯佚』卷下『蔡寬夫詩話』) 文中の

引用は「武功の姚主簿に寄す」(卷四)の第十五・十六句だが、なお「5曾聞清禁漏6卻聽赤城鐘」(卷五「僧の天台に歸るを送る」)で青と同音の清を、「3漸過青塚鄉山盡4欲達皇情譯語初」(卷九「于中丞の回紇の冊立に使するを送る」)で黃と同音の皇を借りるなどの數例がある。しかしこれは純粹に遊戲的なものと見なしてよいであらう。

(2)就對(或いは當句「有」對)對句の上下二句のなかに、それぞれの對句のある形式。「小院迴廊春寂寂。浴鳧飛鷺晚悠悠。」(杜甫「涪城縣の香積寺の官閣」)「龍光射牛斗之墟。徐孺下陳蕃之榻。」(王勃「滕王閣序」)等を、「滄浪詩話」《詩體》は用例とする。「詩人玉屑」(古典文學社版七三ページ)では「連珠」と名づけて十例をあげ、賈島の「3萬水千山路4孤舟幾日程」(卷三「耿處士を送る」)もふくまれる。かれはこの形式をしばしば用いている。(李商隱には全句この形式によつた當句對と題する詩がある)

3 孤舟行一月
4 萬水與千岑

3 一宵三夢柳
4 孤泊九江秋

卷三「吳處士を憶う」

卷八「柳舍人宗元に寄す」

3 流星透疎木
4 走月逆行雲

卷八「山寺に宿る」

(3)合璧 「句中の意味が相關關係にある。」(句中意相關)ものと「詩人玉屑」(七四ページ)に定義されるが、つまり上下兩句がおのおの二個の完全なセンテンスから成る對句である。①「沙平 寒水落。葉脫 晚枝空。」(褚亮「霽るを喜ぶ」)②「舟移 城入樹。岸闊 水浮村。」(岑參「漢陂に泛ぶ」)賈島の例は引かれてないが、かれはこの、より複雑な技法をも好んで用いた。

③ 磧遙 來鴈盡

4 雪急 去僧逢

卷五「慈恩寺の

霄韻法師 太原

の李司空に謁す

るを送る」

④ 3 身暖 蕉衣窄

4 天寒 磧日斜

⑤ 5 火燒 岡斷葦

6 風卷 雪和沙

卷四「陳判官の

綏德に赴くを送る」

⑥ 3 鳥歸 沙有跡

4 帆過 浪無痕 卷三「江亭晚望」

「合璧」の對句だと、述語としての動詞或いは形容詞が極限に近くまで増加するから、杜牧の近體詩、たとえば有名な「江南春絶句」に端的に示される通り、用言をほとんどはぶき、「一句一句のこまかい描寫にとらわれず、部分は荒くえがきながら、詩一篇のすじを太くつらぬく」のは「漢文教室」第三九號・清水茂『杜牧近體詩の一つの技法』、正反對の效果を生む。賈島のように文字通りの點描の詩人には、この表現手法は缺くべからざるものであつたろう。ただ注意せねばならぬのは、動詞・形容詞の増加にもかかわらず、それが動きの多い柔軟な性質を與える作用をしていないことである。一つの句に必らず二つのセンテンスが對立的に存在するゆえに、ことばの流れは絶えずせき止められ、「盡、逢」「歸、過。有、無」「燒、（卷）。斷、和」など、このうちただ一つ「卷」をのぞきいずれも活動的でなく靜止ないしは行爲の停止を意味する動詞と相應じて、流動性よりも澁滯性が強く押し出される。かれの詩が「澁澁」といわれるのも當然である。

賈 島（荒井）

第二の「就對」でも事情は異ならない。ここでは、二つのセンテンスの代りに、二つの單語（またはフレーズ）が一句のなかで對立する。とりわけ「山寺に宿る」の詩においては、速度と自由を持つた物體、流星・走月が、まばらな木の枝というせまいわくにはめこまれ・逆進する行雲によつて摩擦を受ける。常に、何等かの形で挫折を感覺せずにはおられないかれの精神の反映である。

目前の些細な現象を追求するばかりではなく、その底に存在する理法（理致とも呼ばれるもの）に對しても、かれは鋭敏である。

- 5 樹老因寒折 木は古かつたので寒さによつて折れ、泉は深いので井戸から出るのが遅れる。（卷四「青龍寺の鏡公の房に題す」）
- 6 泉深出井遲
- 5 病令新作少 病が新作を少くさせ、雨が昔なじみの來訪をはばむ。（卷六「病より起く」）
- 6 雨阻故人來

- 5 岸遙生白髮
- 6 波盡露青山

（故國の）海岸までは遠くてしらが生え、波濤を越え盡くしたのち青々とした山が見える。（卷七「褚山人の日東に歸るを送る」）

たしかに、「事物の原理のすがたについては、毛すじほどももしつかと認識する。」（方嶽）むしろ毛すじほどもをこそしつかと認識する。

かくして、「ひとり行くふちの底の影。おりおりいこうこかげの我が身。」（5 獨行潭底影 數息樹邊身〔卷三〕「無可上人を送る」）の二句に、

二句三年得

二句は三年かかつてでき、ひとたび吟ずれば

一吟雙淚流

ふたすじの涙が流れる。わが詩才を認める人

知音如不賞

がもし賞讀しなければ、歸つてふるさとの秋に身を横えよう。

歸臥故山秋

と注し（魏泰「臨漢隱居詩話」、一言一句に至るまで苦吟

を重ねるかれが、全篇の構成にはかえつて氣を配つた形跡はなく、作品の有機的な統一には無關心で、明時代の文學者・楊慎（1498～1556）の説どおり、かれ（およびそのグループ）の五言律詩はほとんど一定の形式をとる。「第一・第四の二聯はみな平々凡々、第二聯は俗つばいことば十字で、ひと續きにやりすごす。第三聯はこれを頸聯というが、技巧をきわめる。」（起結皆平平。前聯俗語十字。一串帶過。後聯

謂之頸聯。極其用工。「升庵詩話」卷一一『晚唐兩詩派』）それが同一表現の反復・題材のせまさととも連關して、惡くすれば千篇一律との批判を招きかねない。

そのころの話として、劉得仁が詩集をたずさえて毒舌家の薛能（877～880）を訪れると、「薛能は次の二句によつて謝意を表した。『千首でも一首でも同じ。卷頭でも卷末でも同じ。』と。」（能以句謝云。千首如一首。卷初如卷終。「唐才子傳」卷七「薛能」もとづく所は「北夢瑣言」卷六の『陸龜蒙追贈薛能州府』の條であろう）賈島の亞流の陥りがちな缺點をいいて得て妙である。

4

賈島の墓誌銘によると、その家系は漢時代の不遇の天才・賈誼（B.C. 201～169）に發するとあるがこれは怪しい。前二世紀以來の名門どころか、先祖代々の官職は未詳とだけで、父の名も記されておらず、よく行つて地方の小役人クラスが精々のところ。かれ自身は僧とならねばならなかつたほどの貧窮ぶりであつた。家族關係については、弟

(卷三「洛陽道中 弟に寄す」と、夫人の劉氏(子はない)のほか、賈晔という従叔がいた(卷五「石門陂にて従叔晔に留辭す」)従叔とは祖父の兄弟で父より年少の者)ことを知りうるのみである。なお、無可が賈島に與えた詩ではかれを従兄と呼び、また無可をかれの弟とする説もあるが(陳振孫「直齋書錄解題」卷一九)、確實ではない。

その生存期間は推定可能で、武宗皇帝の會昌三年(833)に六十五歳(或いは六十四歳^⑩)で死んでいるから、生まれたのは代宗皇帝の大曆十四年(779) 或いは德宗皇帝の建中元年(780)のはずである。

かれは范陽(いまのベキン市南方の涿縣)の出身で、瀛州(いまの河北省河間縣)の法善寺に入つて出家となつたと伝えられるなど(「日下舊聞」卷三〇所引『長安客話』、河北省中部にあつたかれの遺跡についての記載は、明および清代の地理書には特に多い^⑪)。

元和六年(821)の春、三十二歳の僧・無本——すなわち賈島——は洛陽に来て、韓愈に會ひ、秋、(韓愈とともに?)都の長安に行き、十一月、かれと別れて范陽に歸つた。孟

郊および張籍との對面もこの一、二年のあいだで、これが韓愈一門とかれとの交渉のきつかけである。かれは恐らくこの時期に韓愈にすめられて還俗し、科擧を受験して官僚たらんところざすようになった。それ以前、かれの青年期の足どりはよく分らない^⑫。

韓愈は、晩年には官吏の任免權を持つ吏部侍郎の官にまで榮進し、文學者としてだけでなく、官僚政治家としての手腕をもそなえていた、文壇のボスの存在であつた。劉禹錫によつて輕薄すぎると評されたように、人をからかうのが好きで、ユーモアと機智に富んだかれは、才氣ある人物を愛し、その門下には官僚志望の若者たち——同時にそれは新進文學者でもあるが——を多く集めていた。一面から見ればかれの勢力扶植策にちがいないが、そのすぐれた包容力のあらわれであることはたしかである。かれは貧乏書生の賈島を親切にはげますばかりでなく、物質的に援助もしてくれた。「一度寢ついてから三四十日間、手紙を下さるのはただあなただけ。……身につける衣服はたびたび贈つてもらひ、はちの食物もまた分けていただいてる。」

(1) 臥三四句2 數書惟獨君5 身上衣頻寄6 甌中物亦分「卷七」疾に臥し筆を走らせて韓愈の書問に酬ゆ」)

元和十四年(819)正月、韓愈が憲宗皇帝の怒にふれて潮州(いまの廣東省潮州市)へ追放されたとき、賈島は涙を流しつつその消息を聞き、翌年九月、韓愈が許されて都へ歸つて來ると、病氣をおしてお祝いに行つたという。(卷三「黃子陂にて韓吏部に上る」)かれはそれほど韓愈を敬愛し、信賴していたのだが、その韓愈が、長慶四年(824)十二月、五十七歳で病死する。貧困のなかに受験生活十年をこえ、依然として落第を續けるかれは、このときもはや四十六歳。他に有力な知人もないまま、至急に次のパトロンを探さねばならぬ。

かれは牛僧孺派の文人宰相・令狐楚(765~836)のもとに走つた(或いは、令狐楚と親密な李逢吉の門生であつた姚合からのつてであつたか)。寶曆元年(825)ないし太和二年(826)、令狐楚が宣武節度使として汴州(いまの河南省開封市)に駐在の當時である。「梁の國の庭園であなたの軍司令部に參上してから 海草はいくたび枯れそして春を迎えただろ

う。」(1 梁園趨戟節2 海草幾枯春「卷五」「令狐綯相公を送る」)令狐楚も韓愈と同様文學好きの政治家で、文章だけが取り柄だと、仲の悪い元稹に惡口されて憤慨したこともあり、「ちようど元稹が初めて天子に氣に入られて(翰林)學士となつていたが、ふだんから令狐楚……を憎み……『かれは早くから文藝によつて、高位にのぼり得た。……實に才能ある者の登用を妨げている。』といつた。令狐楚は元稹を深く恨んだ。」(時元稹初得幸爲學士。素惡楚……曰。楚早以文藝得踐班資。……實妨賢路。楚深恨稹。「舊唐書」卷一七二「令狐楚傳」)この選擇はそれ自體としては當を得ていたかも知れないが、韓愈の親分格であつた裴度(765~839)をえらんでもよかつたのではないだろうか。しかし賈島のようなその言行にとかくの批判があつた貧乏文士を容易に受け入れる黨派は牛黨でしかありえない。(九世紀の政界には、六朝時代以來の名門たる李德裕の黨派すなわち牛黨と、科擧の制度によつてのびて來た新興勢力の牛僧孺派すなわち牛黨とが對立抗争していた)

そのころ政界の元老として重きをなしていた裴度のため

に、科擧合格を妨害されたと怒つた賈島が、裴度を風刺する詩を作つたという傳説(?)は、約六十年後に、詩歌にまつわる物語を集めた「本事詩」のなかに見え、さらに十二世紀前半の「古今詩話」と「唐詩紀事」、同じ世紀六十年代の「韻語陽秋」および十三世紀なかばの「詩林廣記」、この四つの宋代の詩話に引かれている。「裴度が別荘を

曰。破却千家作一池。不栽桃李種薔薇。薔薇花落秋風後。荆棘滿庭君始知。由是人皆惡其侮慢不遜。故卒不得第。抱憾而終。〔顧氏文房小說本「本事詩」『怨憤第四』〕

裴度が問題の別荘を建てたのは、寶曆二年(860)すえか太和元年はじめ(861)で、その池のそばにはバラが眞赤な夕焼けのように咲きみだれていたといわれる。^⑭このころから十年ばかり前には裴度が令狐楚を翰林學士の位置から追ひ、翌々年には令狐楚のため裴度が宰相の位置を追われ、またこの寶曆二年にも二人の意見が對立したことがある。牛僧孺および同じく牛黨のリーダー格・李宗閔も、裴度の

恨憤慨は特別ひどかつた。そこで庭内に詩を書きつけた。『千戸の人家をとりこわし一つの池を作り、モモやスモモを栽培せずバラを植えた。バラの花が落ち秋風ののち、イバラが庭に満ちてから君は始めてさとりだろ。』それから人はみなその高慢ちきな侮辱と不遜を憎むようになった。それでついに及第できず、恨みを抱いて生を終えた。』

行爲が氣にくわなかつた。裴度自身は牛黨ではないにせよ、ともかく牛黨の連中とはうまく行つていない。従つて、賈島が令狐楚のもとに走つたのと時を同じくしてこの出來事が起つているのだから、傳説と片づけるには周圍の條件がそろいすぎてはいる。前記の詩が事實賈島の裴度への風刺であつたとしても、裴度のために落されたとするのは單なる邪推と考えられぬでもないが、邪推をいだかせるだけの理由がどこかにあるのではなからうか。

(晉公度。初立第於街西興(以上十字は唐詩紀事)化里。鑿池種竹。起臺樹。島(島の字は底本缺。唐詩紀事によつて補なつた。)時方下第。或謂執政惡之。故不在選。怨憤尤極。遂於庭(庭の字は底本缺。津逮祕書本によつて補なつた。)内題詩

理由がどこかにあるのではなからうか。

陳寅恪氏はいう。「そののち（元和十二年〔821〕吳元濟の反亂討伐以後——荒井）になると鬭争の程度はときの經つにつれて次第にはげしさを増し、當時の知識人はたとえ自分を局外中立にしておこうと思つても、ほとんど不可能であつた。牛黨の白居易が消極さによつて許容されたのは……例外といふべきである。そのほかの人はもし一定した明かな表示がなければ、牛黨・李黨にまたをかけて最後まで一黨に屬することのできなかつた李商隱のように、ついにどちらの兩黨からも受け入れられず、そして『名譽・官位は進まず、うだつがあがらぬまま生を終える。』……この點は唐代中期末期の知識人の生涯を研究するもつとも重要なかぎであり、絶對におろそかにしてはならぬことである。」

〔唐代政治史述論稿〕一〇〇ページ）

賈島はもちろんその典型的な例ではないが、相當の官位をえた李商隱とはちがつて、晩年のごくわずかの時期以外は無位無官で通したこの貧窮詩人の運命を左右するもの、やはり、政争とはいへぬまでも政局であり、かれも心ならずも政治のうず巻きこまれた犠牲者の一人ではなかつた

ろうか。なぜなら、かれの生活上のある地點において、何かが起つたとまでは判断できるが、そこから先は常にベールに包まれている。作品にはほとんど手掛かりは残されない。言及はしても重要なポイントについては必らず沈黙する。このバラの詩は、具體的事實が明示される、唯一の例外である。

さらに、久しく及第しなかつた賈島は「病める蟬」（卷六）の詩を作つて當局をそしつたため逆にその怒りを買ひ、長慶二年（822）の科擧に際して平曾^⑩などとともに「受験場の十惡人」（舉場十惡）として放逐されたともいわれる。

〔唐詩紀事〕卷四〇『賈島』・卷六五『平曾』

病蟬飛不得
病めるセミは飛ぼうとして飛べず、私の手のひらの上をはう。折れたはねだがやはりなんと見事な薄さ。悲痛な鳴き聲だがなおきわめて清らか。露の花が凝つて腹につき、ちりの粒があやまつてひとみを侵す。黄色いスズメとトビとが、ともにお前に害意を抱いているぞ。

折翼猶能薄
酸吟尙極清
露華凝在腹
塵點誤侵睛
黃雀并鳶鳥
俱懷害爾情

この詩をめぐるトラブルについては、十世紀の雜文集「鑒戒錄」に同じ内容の記載があるから、それに基づくのかも知れない。この「鑒戒錄」を書いた何光遠は、賈島の死後百年ばかりしてから、賈島と同じ場所に在職していた官吏で、賈島に關するエピソードを豊富に集録し、かつ恐らくは著者自身の、少し面白すぎる脚色を加えた一篇の賈島小傳を殘している。たとえば、「賈島は初めて受験場へ行つた。

ひごろから先輩を輕んじていたが、八百人の受験者のやることはどれもこれも自分には及ばないとみて、それからはしばしばひとりでしゃべつては、そばに人間などいないみたいだつた。或いは盛り場で聲高に吟じ、或いは大道せましとうそぶいた。」（島初赴名場。日常輕於先輩。以八百舉子所業悉不如己。自是往往獨語。傍若無人。或鬧市高吟。或長衢嘯傲。「卷八『賈忤旨』」）といったぐあいだが、いずれにせよ賈島が一生のあいだ失意の人物であつたのはたしかであり、このほか各種の書物のなかにも、自分の才能をはこりその不遇に怒つて、人を人とも思わぬ行爲をくり返していたと記されている。實際、かれは當局の不公平が科擧に合格でき

ぬ原因だと堅く信じていたらしい。パスしたばかりの友人に向かつて、君の及第は「まったく試験委員が公平だつたおかげだ。」（6全賴有司平「卷六『雍陶の及第し成都に歸りて寧觀するを送る』」）などと、まじめな顔でいい出す始末である。しかし權力者による及落決定への干涉その他の暗取引が科擧につきものだつたのも事實である。

長年にわたつて苦闘を續けたかれがようやくにして目的地に到達するときが來た。開成二年（883）、五十九歳にして一地方官吏の職にありついたので。だがそれは皮肉にもあれほどまでに苦しんだ科擧を通じての任官という正規のルートによつてではなかつた。かれは多數の非難攻撃を受けたため、體のよい追放處分となり、遠くいまの四川省中部に當る長江縣の主簿（文書係の長）として都落ちさせられたのである。もつとも、かれが何故にそしていかなる非難を受けたのか、くわしいいきさつは不明で、たとえば前記「鑒戒錄」に、おしのび好きの、ときの皇帝にうまくぶつかれば、仕官の道も何とか開けるとかねがね考えていた賈島が、せつかく出會つたのにそれと氣づかずに無禮をは

たらき、後悔のあまり寺の鐘樓の上から飛び降り自殺を計ろうとまでしたが、憐れに思つた帝は罪を許し……とあるのなどはさて置いても、墓誌銘には「そして非難されて平服を脱ぎすて、(罰として) 遂州長江の主簿を授かつた。」(遂羅誹謗解褐。「責」^⑧授遂州長江主簿) と明記され、「新唐書」(卷一七六「賈島傳」) も「文宗皇帝のとき、非難されて罪になり、長江の主簿に落された。」(文宗時。坐飛謗。貶長江主簿) とそれに同調する。

岑仲勉氏は宋時代の書誌學者・陳振孫の説(「直齋書錄解題」卷一九)を引いて、科擧の合格者でも、各縣の主簿あたりから出發するのは普通だし、まして萬年官吏候補生の賈島の場合、このたびの任官は恩恵でこそあれ、罰せられたなどの意識は毛頭なかつた、墓誌銘にいう非難攻撃は確證のないことで、眞實性ははなはだ疑わしく、唐末の人々が事情の分らぬままに勝手な傳説を創作したのだとしている。

(「學原」一卷八期『賈島詩註與賈島年譜』^⑨)

しかし、かれと同時代の人たちは、現實に、「長沙(賈誼をさす)のことは悲しむべきだ。普州の屬官(賈島)の罪

をだれが知ろう。」(「長沙事可悲」普掾罪誰知「姚少監詩集」卷三「賈島に寄す 時に普州司倉に任ず」)「にわかに一官職について遠く流離の身となつたが、無罪なことはつまびらかに知る人はいない。」(「忽從一宦遠流離」無罪無人子細知「全唐詩」卷二二・李頻「長江に過りて賈島を傷む」)と、罪もないのに流し者同然のうき目に會つたその不運を悲しんでいるのである。

結局のところ、賈島の任官―追放(?)問題については、それが實際政府部内で論議され、山南西道節度使として興元(いまの陝西省南鄭市)にいた令狐楚がそのとき何等かの形でかれを援護したのかも知れぬというほか、確言できることはない。岑氏のように、「飛謗」を一概に否定してしまうのも考えものである。

長江飛鳥外
主簿跨驢歸

逐客寒前夜

元戎與厚衣

雪來松更綠

長江は飛ぶ鳥もかわぬ。主簿はロバにまたがつて歸る。放逐されんとする旅人はその前夜寒かつたが、司令官(令狐楚)は厚い衣服を與えられた。雪になれば松はさらに綠に、霜が降れば月はいよいよ輝く。もしも中央に

霜降月彌輝　と非を判別して下さるだろう。（卷六「令狐

卽入調殷鼎　相公の衣丸を賜わりし事を謝す」）

朝分是與非

かれは長江の主簿を三年つとめたのち、開成五年（885）に、すぐ近くにある普州の司倉參軍（食糧關係事務の長）に轉じてさらに三年、會昌三年（888）普州の官舎で病没した。死後十日あまりして晉州（いまの山西省臨汾縣）へ轉勤の辭令がとどき、ふたたび都長安の土を踏むこともできるはずであつたが、ときすでに遅かつた。

墓誌銘の筆者・蘇絳によれば、かれの「（人柄はおだやかで美しく）いまだかつて他人のよしあしを批判したことになかつた。」（性和茂^⑩）未嘗評人之是非^⑪）しかし「本事詩」以下の諸書のなかでは、まつたく裏腹の、批判精神のきわめて盛んな人物に描かれていることはすでにのべたごとくだが、韓愈の手に成る戯文めいた歌物語「石鼎聯句詩併びに序」に主人公として登場し、侯喜や劉師服など韓愈の弟子どもを煙に巻いた奇怪な道士・軒轅彌明こそ實は賈島なりとの説さえ早くから存在していた。「私の同期の科擧合

格者・李道立の話では、あるとき唐代の人の作つた賈島の墓石に、『石鼎聯句にいうところの軒轅彌明はすなわち君である。』とあるのを見た、と。」（予同年李道立云。嘗見唐人所作賈島墓碣云。石鼎聯句所稱軒轅彌明卽君也。〔洪興祖「韓子年譜」『元和七年』〕その説の記錄者・洪興祖（1090～1155）は、「こじつけのでたらめ」（附會之妄）と否定してはいるが、傍若無人の才子肌だつたとされるかれの逸話のかずかずを思うとき、こうした誤解の發生はまことに興味ふかい。

墓誌銘が根本資料であるのはむろんだが、蘇絳は當人から直接執筆を依頼された身近の人だけに、主觀のより多くはいる可能性がある人物評價を額面どおりに受取つてよいか疑問であり、片々たる雜記のたぐいにも着目せぬわけにはいかない。要するに、賈島は、「エクセントリックで行為は低級」（狂狷行薄。〔古今詩話〕）「ひどく片意地な素質のため、役に立つ餘地がない。」（以僻澁之才。無所采用。〔北夢瑣言〕卷六「杜荀鶴入翰林」）というのが、蘇絳をのぞく多數の最大公約數的意見なのである。

唐代の詩人は李白や李賀をはじめ、さまざまな逸話の持

ち主にことかかない。それらの逸話は眞偽はともかくとして、李白が水面の月をつかもうとしておぼれ死んだとか、李賀の臨終に天帝が迎えの使者をよこしたとか、いかにもその人その詩にふさわしいものばかりである。が、賈島だけは、作品の表面およびオーソドックスな傳記からする印象とは、正反對の詩人像が作り出される。そしてかれの外見がまた——我々はデッブリ肥つた芥川を想像できないが——「ふと唐朝の有名な寒瘦詩人賈島も圓顔で太短かい體つきだつたのを思い出して」（錢鍾書「圍城」六九ページ）とあるように、かれの詩とはおよそそぐわぬ姿に傳わつてゐる。（「歷代君臣圖像」參照）

5

姚合・賈島グループは、時代の現實を積極的に表現しようとした作品をほとんど持たない。（立派に社會詩として通るのは姚合の「莊居野行」「姚少監詩集」卷六）ぐらいで、ほかには前記雍陶の連作五篇があるのみ）かれらの詩集から社會的でないし政治的關心なるものを引き出そうとするのは不可能

とも見える。

「この現象はいま見てみると新奇にちがいないが、實は正に舊中國の傳統的社會制度下での正常な状態なのだ。」官職につかず、従つて社會的國家的に責任をなうことのない年若い知識人は詩を作るほかにすることがなく、同時にそれが唯一の出世街道だつたのだと、聞一多は、はなはだ同情的で、萬一詩が嚴格な規格外であるか、運が悪ければ、一生涯詩を作り續けておらねばならない。賈島こそ外ならぬこの異様な制度の完全無缺な犠牲であつたのだと結論する。賈島にとつてまことに有りがたい議論にはちがいないが……。晩唐の文學者・皮日休（833?~883）は、中國文學史上の現實主義の傳統の旗手であり、農民の革命運動の支持者であつたとして、今日高く評價されているが、白居易の精神を受けついで社會の暗黒への憤りを歌つた「正樂府」十篇をふくむかれの著書「皮氏文藪」には、咸通七年（866）の自序があり、それはかれが官吏試験に及第する前年、三十三歳の時に當る。まさかかれが責任ある地位につく以前に、すでにそのことを豫知して社會改良を叫

んでいたのではあるまい。かれも比較的低い身分の出で、頼るべき知人はなく、家に財産があつたわけでもない。

「これがすなわちかれを容易に革命に傾むかせた原因」であつたと、李長之氏はのべている。唐王朝が完全に滅亡したのは天祐四年(907)だが、前世紀後半に入つてからは、刻々と全身不隨症狀が進行しつつあつた。そして滅亡以後約半世紀、宋王朝による統一(960)まで中國は名實共に分裂状態に陥る。西暦九百年前後は、賈島の時代よりも事態ははるかに悪化していた。この、文學者にとつては困難きわまる社會の轉換期の混亂のなかでなお、「そもそも詩は國民の聲・帝王の恩澤にもとづき、それによつて上を風刺し・下を教化せんとする。かりにもこうでないとすれば、何が詩人か。」と、世道人心のための文學を眞向から振りかざした黃滔などが、「大唐(帝國)は前に李・杜があり、後に元・白がある。……『長恨歌』に……とあるように、その意味は險しくてすぐれ、その文脈は平らかでやさしい。いわゆる之を言う者は罪なく、之を聞く者は以て自戒するに足るだ。そのうちに賈島が出ると、多くの賢才は九仞

の地底の泉までさぐりながら、ただ水のかけらをすくい、音樂の寶庫のありだけをさらえ出しながら、ただ一本のふえを求めることとなつた。」(且詩本於國風王澤。將以刺上化

下。苟不如是。曷詩人乎。……大唐前有李杜。後有元白。如長恨

歌云……其意險而奇。其文平而易。所謂言之者無罪。聞之者足以自戒哉。逮賈浪仙之起。諸賢搜九仞之泉。唯掬片水。傾五音之府。

只求孤竹。「唐黃先生文集」卷七「陳磻隱に答えて詩を論ずるの

書」)と、かれを非難するのは當然すぎるほど當然である。

黃滔のように熱烈なる(或いは頑迷なる)愛國詩人には、

聞一多の卓拔な着想による賈島辯護論も齒が立ちそうになりが、第一、聞一多が立論の前提においてかれを完全な沒社會的生活者と規定するのは、やや武斷にすぎよう。なぜなら、かれには政治的發言權はなかつた、だが朝廷内部の抗爭に直接間接に影響されたとするなら、かれが政治にプラスすることはなかつたが、絶對値はかなり大きいマイナスの形で連關はあつたのだから。

かれの時代は、或いは回復可能かとも見えた唐王朝の病狀に、次第に絶望的徴候があらわれはじめたところである。

内憂と外患。回鶻・吐蕃・南詔等異民族の壓迫、宦官の權力の強大化、牛・李の黨争。その間を縫つて徹底した政治改革を意圖したクーデターが、李訓（772-805）鄭注（788-805）によつて起されたが、皇帝直屬軍の指揮權を握る宦官のために即日制壓された。太和九年（805）の、いわゆる「甘露の變」であるが、このとき、賈島と同様に韓愈に近い詩人・盧仝が、事件には無關係であるのに偶然宰相の家に泊つていたことから卷きぞえを食つて殺された。「唐才子傳」（卷五）によると、そのはげた頭に^{くぎ}が打ちこまれたという。盧仝と交友のあつたかれは五言十八句の「盧仝を哭す」（卷一）る詩を作つた。かんじんの死因については、例によつて何一つふれぬので、この詩は引用しないが、友人のむざんな最期と、その背後にある不安な世界とは、ひしひしと身にしてみえていたであらうと考えざるを得ない。

- 23 青塚驕回鶻 青塚には回鶻（ウイグル）人があはれ、蕭關は吐蕃（チベット）人が陥れた。いつ長雨の歲月が晴れ、いつ國の恥がすすがれるだろう。（卷五「滄州の李尙書に寄す」）
- 25 何時霖歲早
- 26 早晚雪邦寬

幾歲阻干戈
今朝勸酒歌
羨君無白髮
走馬過黃河
舊宅兵燒盡
新宮日奏多
妖星還有角
數尺鐵重磨

- 5 地春寒雪盛
6 山淺夕風輕
7 百戰餘荒野
8 千夫漸偶耕
- 5 澄徹霜江水
6 分明露石沙
7 話言聲及政
8 棧閣谷離斜

幾とせか戦いにはばまれたが、けさは酒をすめて歌う。君はしらがもなく、馬を走らせて黃河まで行くのをうらやむ。古い邸宅は兵火に焼け盡くし、新しい宮殿は日々に上奏が多い。怪異の星としてなお角宿が輝き、數尺の劍をまた磨き直す。（卷五「舊識に逢う」）

地上は春だが寒い雪は盛ん。山は淺く夕風は輕い。②百たびの戦いで荒野を残すのみ、千人の農夫はようやく連れ立つて耕やしはじめた。（卷五「徐明府に別る」）

澄みきつた霜を思わせる川の水。露にぬれた石のあらわれた砂原。話しの聲は政治にふれ、棧道は谷間にななめに連なる。（卷六「令狐綯相公に寄す」）

ごくかすかにではあるけれども、かれの詩からこういう歌聲を聞くことができる。それがごくかすかでしかないのは、意識的な作爲の結果である。かれは社會的・政治的關心を持たなかつたのではなく、一般に外部の現實世界に向けられるべきであつた精神を一切、詩へとつぎこんだためである。

かれの發想法にはしばしば逆説的な屈曲が見られる。

3 井底有甘泉

井戸の底には甘い泉があるが、かまの中はなんと空っぽでたかれる。……飢えても他家のとびらをたたいてはだめだ。古人に口べた(で惱んだ)例がある。(卷一「朝に飢

4 釜中乃空然

11 飢莫詣他門

12 古人有拙言

う」

あとの二句は、陶淵明の「食を乞う」の詩に、「飢えが来て私を驅りたてて行く。一體どこへ行くのか分らぬ。どんどんとこの村までやつて来て、門をたたくがどうも口べただ。」(1 飢來驅我去 2 不知竟何之 3 行行至斯里 4 叩門拙言辭)とあるのに引つけて、しかもそれを裏返しにした。

5 有子不敢和

6 一聽千嘆嗟

あなたがおられては唱和しかねます。ひとたび聴けば千度嘆息。……一對の美しい寶

15 欲買雙瓊瑤 石(にも似たあなたの詩)が欲しいんだが、お返しは、けの實一つないのが恥ずかしい。

16 慙無一木瓜

(卷二「張太祝に投ず」)

あとの二句は「詩經」の『衛風』木瓜(第一・二章)に「わたしに^{ばけ}の實を投げてくれた。お禮に美しい玉をあげよう。」(1 投我以木瓜 2 報之以瓊瑤)「わたしに桃の實を投げてくれた。お禮に美しい寶石をあげよう。」(1 投我以木桃 2 報之以瓊瑤)とあるのをもとの意味とは完全に逆の方向に、自分の才能のなさを卑下する意味に引用する、當時としては新鮮で巧みな用例である。

5 是藥皆諧性

6 令人漸信仙

およそ藥ならばみな性質をそらんじ、人々に次第に神仙を信じさせる。(卷七「孫逸人を送る」)

これも「古詩十九首」(第十三首)「食べ物によつて神仙をこころざしても、多くは藥がまちがいのものになる。」(16 服食求神仙 17 多爲藥所誤)の逆用。

これらの屈曲は、直線的にのびることを知らぬ、常にねじまがり・凝縮する、執拗なかれの反語的・否定的精神につながりつつ、それをもつとも端的に反映するものと解釋

するよりないであろう。

韓愈はかれの文學を論じていう。「無本は創作の點では、體の大きさもその肝つ玉には及ばない。私はかれに難題を與えたことがあるが、勇敢に立ち向かつて突進せずにはおかなかつた。みずちと竜の、つのやきばをもてあそぼうとし、早速手に取ろうとする。あまたの亡靈どもを幽界にとらえようと、はるかに下、暗黒のほら穴をのぞきこむ。…狂的なことばはとめどなく降る花びら、低まり高まる調子につれ快活と陰鬱が示される。」（1 無本於爲文 2 身大不及膽 3 吾嘗示之難 4 勇往無不敢 5 蛟龍弄角牙 6 造次欲手攬 7 衆鬼囚大幽 8 下視襲玄宮 15 狂詞肆游葩 16 低昂見舒慘（錢仲聯「韓詩集釋」三五七ページ）『無本師の范陽に歸るを送る』）清代の學者・何焯（1661～1722）は「賈島の詩は……この賛辭には、どうもうまくあてはまらぬようだ。」（閩仙詩……於此贊語。似尙未能稱。「昌黎先生詩集注」卷五・批）と疑問にしているが、唐詩についての常識が少しでもあれば、かれならずとも反撥を感じさせる賛辭にちがいない。

しかし孟郊もまた、

長安秋聲乾
木葉相號悲
瘦僧臥冰凌
嘲詠含金瘡
金瘡非戰痕
峭病方在茲
詩骨聳東野
詩濤湧退之
有時踉蹌行
人驚鶴阿師
可惜李杜死
不見此狂癡

とまでいうではないか。ここで我々はいままで見すごしてきた六十首にあまる賈島の古詩をふり返つてみねばならない。

維泉肇何代
開鑿同二儀
五行分水火

長安に秋のざわめきは乾き、木の葉が互いに號泣する。やせた僧は氷塊に横たわり、毒舌の詩歌は刀きずを含む。刀きずは戦傷ではなく、きびしすぎるその病癖がまさにここにあるのだ。詩の骨格は孟郊を越えてそそり立ち、詩の怒濤は韓愈を越えてわきあがる。ときにはよろよろと歩き、人はツルのような坊さん（？）に驚く。惜しむべし、李白・杜甫は死し、この狂痴とは出會わないのは。（孟東野詩集」卷六『戯むれに无本に贈る』二首之一）

そもそもこの温泉はいずれの時代にはじまつたのか？開かれたのは天地と同時だ。五つの元素のうち水と火とは別ものだが、その用途をだれが一つにしたのか。占いでは水火まじ

厥用誰一之
在卦得既濟
備象坎與離
下有風輪煽
上有雷車馳
霞掀祝融井
日爛扶桑池
氣殊礬石厲
脈有靈砂滋
驪山豈不好
玉環汚流脂
至今華清樹
空遺後人悲
遐哉哲人逝
此水眞吾師
一濯三沐髮
六鑿還希夷
伏毛反骨髓
髮白令人夥
十年走塵土

わるしるし・既濟をえ、卦面に出了のは坎と離。下からは風の車輪があふりたて、上には雷の車が走る。夕燒けはこの、火の神・祝融の井戸を高く押し上げ、日はこの、神木・扶桑の池に輝く。空氣は特殊で毒をふくむ石から盛んに發散し、泉脈には靈驗のある砂が多い。驪山の溫泉なんてどうも好ましくなさうだ。楊貴妃が汚ならしくあぶらを流した。今日でもあの華清宮の樹木は、空しくのちの人に悲しみを與える。はるかにも哲人・孔子が去つてから、この水こそは眞にわが師。ひとたび湯あみすれば三度髪を洗うが、六つの感情はなお恍惚としている。抜けた毛根も骨のずいへともどり、髪が白くてもその人（の頭）は黒くなる。十年よこれた俗世に暮し、わたしの汗漫との約束にそむいてしまつた。ふたたび來てこの池で遊ぶのは、熱くてならぬ三伏の季節。古寺に僧はさびしく、ただ壁上の詩が残るだけ。詩を書きつけた人は見えず、わたしに長嘆息をさせる。（「黃山志定本」卷六『湯泉を紀す』）

賈 島（荒井）

負我汗漫期

再來池上遊

觸熱三伏時

古寺僧寂寞

但餘壁上詩

不見題詩人

令我長嘆咨

かれが黃山（いまの安徽省歙縣西北にある）の溫泉に遊んだときの作で、これはほんの一例にすぎないが、かれの近體詩と古詩との距離は他の詩人には見られぬほど大きい。古詩を考へに入れば、韓愈や孟郊の批評を一片の外交辭令と取るわけには行かないし、單なる文學史的知識では賈島を處理するのが困難になつてくる。南宋時代末期にあらわれた「永嘉の四靈」と呼ばれる四人の詩人たちは、かれの崇拜者であり模倣者であつたことはよく知られているが、かれらが賈島を非常に忠實に模倣した結果、かれらの近體詩と古詩との間にも、やはり、同一人の作とは思えぬような相違が生じているのである。

孟郊は、前掲詩の第二首において、さらにことばを續ける。「燕の國の僧（賈島）は大自然をゆすぶり、萬物はかれの手に従つて奔走する。赤色のまじつたころも、はつぎはぎだらけで、高貴の方々を見下して笑う。」（13 燕僧擺造化 14 萬有隨手奔 15 補綴雜霞衣 16 笑傲諸貴門）ここに示される賈島の姿は、公卿、宰相にもたてつき、札つきの不良文人として放逐さえされたといわれる、反骨隆々たるかれのなかば傳説的なイメージにびつたり重なる。その精神が灰色の静けさ・ぬるま湯の溫和さを終始保ちえたはずもなく、

13 錄之孤燈前 （あなたの詩を）ひとつのともしびの前で

14 猶恨百首終 寫しているが、それでも百首が盡きるのは恨めしい。ひとたび吟ずれば狂氣のバネが

15 一吟動狂機 はずれ、あらゆるやまいはこの體から逃げ

16 萬疾辭頑躬 て行く。（卷二「孟郊に投ず」）

何物かによつて怪しくゆさぶられるときがある。いな、かれは實に内にひめたる情熱の持ち主であつた。「別れに臨んで涙もこぼさない、だれが心にむすぶれた悲しみを知ろう。」（7 臨別不揮淚 8 誰知心辭陶「卷七「李戎の扶持して詩安に往くを送る」）

身死聲名在
多應萬古傳
寡妻無子息
破宅帶林泉
塚近登山路
詩隨過海船

肉體は死んでも名聲は存在し、きつと萬古に傳わるにちがいない。とり残された妻には子供がない。くすれた屋敷は森や泉に守られる。墓は山に登る道路に近く、詩は海を越える船で運ばれる。あの人をとむらい終つたあと、傾むいた日が寒むぎむとした天に落ちて行く。

故人相吊後
斜日下寒天

この「孟郊を哭す」（卷三）の詩においても、孟郊自身

のように豊富な表情にこそとぼしいが、賈島には必らずしも好意的ではない批評者の紀昀でさえ、「詩の終つたあとに（情感は）盡さない。」（結得不盡。「瀛奎律髓刊誤」卷四九）と賞讃を惜しまない。

持戈簇邊日 ほこを持ち邊境に集まつた日、戦いは終つて

戰罷浮雲收 浮動する雲もおさまつた。露にぬれた草はさ

露草泣寒鬢 びしい晴れ間に泣き、夜の泉は龍頭水（の歌）

夜泉鳴龍頭 のように鳴る。三尺の手中の武器。意氣は南

三尺握中鐵 斗・牽牛の星を突く。國に報ゆるのは身分の貴さにかかわらぬ、憤れる將軍は仇敵を平ら

氣衝星斗牛 げんとする。(卷二「邊將に代る」)

報國不拘貴

憤將平虜讎

鶴過君須看
上頭應有仙

新蟬忽發最高枝 はつぜみがたちまち鳴きはしめる、もつ

不覺立聽無限時 とも高い枝で。思わず立ち止まつて聞く、

正遇友人來告別 無限の時間。ちやうど友人が來て別れを

一心分作兩般悲 告げ、一つの心は分れて二つの悲しみを
生む。(卷九「蟬を聞くの感懷」)

かれもまたやり場のない怒りと深い悲しみを心にひめる

詩人ではなかつたか。その怒りと悲しみが屈折させられ一

點へと凝集されるときこそ、強烈なエネルギーのほとばし

る五言律詩が創造される——底深い苦澁のかけを宿しつつ。

幽深足暮蟬 奥深い(山に)暮れがたのせみが満ち、驚いて

驚覺石牀眠 石のベッドの眠りからさめる。瀑布は高さ五

瀑布五千仞 千仞。草堂は瀑布のほとり。祭壇の松に點滴

草堂瀑布邊 の露。山岳の月に空虚な天。ツルが飛びゆく

に君は目をとめるがいい。そこには仙人が

乗つてゐるはずだ。(卷三「田卓の華山に入る
嶽月沈寥天 を送る」)

遠夢歸華頂

扁舟背岳陽

寒蔬修淨食

夜浪動禪牀

鴈過孤峰曉

猿啼一樹霜

身心無別念

餘習在詩章

はるかな夢は天台山の華頂に歸り、小舟は岳陽を離れ去つた。冷たい野菜に精進潔齋する。夜の浪は坐禪の床をゆるがす。がんはすぎさつて、孤高の峰は曉。猿は鳴き、ただ一本の木に霜がおりる。身心に他の思念なく、殘る習慣として詩作に打ちこむ。(卷四「天台の僧を送る」)

數里聞寒水

山家少四隣

怪禽啼曠野

落日恐行人

初月末終夕

邊烽不過秦

數里にわたり冷たい水音が聞える。山家に近隣はまれだ。怪鳥がさびしい廣野に鳴く。落ちる太陽に旅人は恐怖する。みかずきはとつぷり暮れるのも待たずに沈む。邊境ののろしは秦の地方まで達しない。さびしげな桑畑のかなた、炊事の煙が何だかしたわしく感じられる。(卷八「暮に山村を過る」)

蕭條桑柘外
煙火漸相親

「姚賈」とならび稱される姚合の詩が賈島に類似するのはいうまでもないが、微妙な、そして重要な差異がある。

元時代初期の文學者で「瀛奎律髓」の編者・方回は、賈島の「夏の夜」(卷四)と姚合の「閑居晩夏」を比較し、

原寺偏憐近
開門景物澄
磬通多葉罽
月離片雲梭
寄宿山中鳥
相尋海畔僧
唯愁秋色至
乍可在炎蒸

平原の寺は近いのでことさらに愛する。門を開けば風景は澄明。磬の音は多くの葉のすきまを通る。月はちぎれ雲のかどを離れる。寄宿するのは山中の鳥。尋ねてくるのは海邊の僧。ひたすら秋のけはいの訪れを憂える。むしろ炎熱のなかにいる方がよい。——賈島

閑居無事擾
舊病亦多痊
選字詩中老

のんびり暮してうるさい用事はない。持病もおおかた直つた。文字を選択して詩のなかで年を取る。山をながめて屋外で眠る。ちぎれ雲が落日の光をさえぎる。茂つた葉に鳴くセ

看山屋外眠
片雲侵落日
繁葉咽鳴蟬

ミの聲がこもる。これらに對すれば心はやはり楽しい。飲みしらのとほしさなど知つたとか。——姚合

對此心還樂
誰知乏酒錢

「姚合は賈島を學んで作詩した……が、姚の詩は小さな巧妙さで、弱いというのに近く、賈の骨ばつた力強さ・品のよい古めかしさに及びもつかない。この、二人の詩によつて細かく味わつて見るべきだ。」(姚合學賈島爲詩。……然姚之詩小巧。而近乎弱。不能如賈之瘦勁高古也。當以此二公之詩細味觀之。(卷一一)と論ずる。紀昀とともに「批評確たり。」というべきであらう。

寒、瘦、澁、或いは蹇澁等、たとえ通常の意味における反價値的方向にむかつてではあつても、一つの極限に達するためには、密度の高い精神がなければならぬ。この密度の高低と、スタイルにあらわされた絶えざる内面の葛藤の有無、そして内包されたエネルギーの強弱。これが賈島と、姚合以下そのグループの詩人たちとの——ほんものと

エ・ビ・ゴーンとの分岐であつた。

注

- ① 「3爲文性不高4三年住西京5相府執文柄7薄藝不退辱8特列爲門生」(『姚少監詩集』卷四『寄陝府內兄郭聞端公』)「1三年貧舍親仁里2寂寞何曾似在城」(同上卷六『親仁里居』)生卒年は、賈島をのぞき、聞一多『唐詩大系』による。
- ② 「唐韓退之……如孟郊張籍。最號友善。而浪仙學詩於劉叉。晚得偕與二子遊。……浪仙沒。距今二百二十餘歲矣。」(『全蜀藝文志』卷三七下・龔鼎『賈閭仙祠堂記』)
- ③ 「雅陶詩五卷 唐志。集十卷。今亡其半。」(袁本『郡齋讀書志』卷四)
- ④ 四部叢刊續編本「周賀詩集」および「全唐詩」は「閑宵上人を哭す」と題する。
- ⑤ 開戸は、賈島集では鎖印に作る。
- ⑥ 廓は廓のあやまり。「宋本杜工部集」卷一二は廓に作る。
- ⑦ 柳宗元とあるが、柳公權のあやまり。李嘉言「古詩初探」九六ページ参照。
- ⑧ 汲古閣本賈島集所載墓誌銘および百衲本「新唐書」賈島傳は六十五才、嘉慶「四川通志」・道光「安岳縣志」および「全唐文」所載墓誌銘は六十四才に作る。
- ⑨ 次注参照。
- ⑩ 李嘉言「賈島年譜」(民國三十六年・商務印書館)の原本は見ることができなかったが、もと雜誌「學原」に掲載された岑仲勉氏の書評と李嘉言氏の答辯を参照し得た。(李氏の近著「古詩初探」(一九五七年・古典文學出版社)所收)それによると、岑仲勉氏は賈島・韓愈初對面の年代について新説を提出する――長慶四年(824)に賈島が韓愈に贈つた作「黃子陂にて韓吏部に上る」(卷五)に、「石樓で(あなたと)一別以來、二十三年。相次いで(あなたに)弟子入りした者は、殆ど骨を埋める身となりました。」(1石樓云一別2二十三年3相逐升堂者4幾爲埋骨人)とある。故に、それから二十三年前の貞元十七年(801)、洛陽にいた韓愈は、すぐ南の汝州梁縣にある石樓山へ行き、その寺に住む僧・無本(すなわち賈島)と會つてゐるに違ひない。(「古詩初探」九八―一〇一ページ)
- ⑪ しかし、賈島はこの詩の作られた時まで、たびたび韓愈と會つてゐるのに、「なぜ『二十三春』といつてゐるのか?あやまりがあるらしい」(九八ページ)とする李氏に對し、岑氏は、「詩人は平明に敘述するのを忌むからで、この句の反語的意味は、我々兩人が知り合つたのは、もう二十三年も前になるというのと同じ、何を疑うのか」(九九ページ)と論ずる。だが賈島の詩集で、古い知人に向つて、初對面を一別以來と表現した例は他にない。すべて直敘である。
- ⑫ さらに、元和六年(811)の作と認められてゐる韓愈の「無本師の范陽に歸るを送る」詩には、「君の家は北國のかたにあり、まだ知り合はぬのに精神は先に感應した。來訪してくれたが私に何の能があろう。タデ食う虫に異る所がない。君

と始めて會つた洛陽の春、桃の枝が赤い粒を連ねた。續いて長安の街に來、時節は十一月に變つていた。年老いてもものぐさの私に闘志なく、久しく文章を作つていない。」(23家住幽都遠24未識氣先感25來尋我何能26無殊嗜昌歌27始見洛陽春28桃枝綴紅糝29遂來長安里30時封轉習坎31老懶無闘心32久不事鉛槧(錢仲聯「韓詩集釋」三六〇ページ)とあり、③「詩の意味を味わうと、いわゆる「來尋」は、かれが最初に來訪したことをさすことになる。」(二〇五ページ)という李氏に對して、岑氏はいとも簡単に「「來尋」は元和の時のこと(韓愈四十四歲——荒井)で、貞元末(韓愈三十四歲——荒井)に一度顔を合わしたことはやはり抵觸しない。」(一一〇ページ)と答えるが、この四句ばかりをすでに面識ある者にいう言葉だとするのは強辯にすぎないか。④「始見洛陽春」の解釋についても、岑氏は通説を否定し、「ただ賈島が元和年間に最初に洛陽へ來たのをいうだけのことで、……貞元十七年の初對面と全く關係はない。」(一一〇ページ)と説くが、不安はぬぐいがたい。

要するに、岑氏の説が通りよくなるためには、この詩の製作年次を貞元十七年に引きあげるよりないが、錢仲聯氏は反對で、韓愈がこの貞元十七年にはまだ三十四歳で、「しかも詩に『老懶無闘心』の句があつて、どうも疑義は多い。なぜなら韓愈が貞元十九年に書いた『十二郎を祭るの文』ですら、『私とお前とはともに年少』(吾與汝俱幼)の語があるから。」それはむずかしい。

では錢氏の假説「或いは賈島集の『二十』の二字は『十』のあやまりか。」に従い、その數字が訂正されるべきか。(すると長慶四年から十三年前は元和六年だから、兩者の初對面の年は通説と合致する。ただし依然として(1)の問題は残るが)だが十では前句の一別と重複するからそうなるはずはない、と岑氏はそれも否定している。(一二二ページ)

問題の詩の第一句「石樓云一別」は、賈島が石樓に對し別れを告げたと讀めるならば、ことは簡單になる。現に、「文苑英華」(卷二五九)所載のテキストでは「石樓雲一別」とあり、「私が石樓の雲と一別以來」の意味にとらねばならない。そして石樓とはかれの故郷の地名或いは住居を意味するのではなからうか。

①(賈)島……後居房山西峪。峪有石菴。是賈島故居。(「日下舊聞」卷三〇所引「長安客話」(「文瑞樓藏書目錄」子部小說隆慶朝「長安客話」八卷・明晉陵蔣一夔彙次)

② 房山縣石口村有賈島庵。云是島爲僧時所棲。負山臨壑。最爲幽勝。(萬曆三十年序刊本「燕山叢錄」卷一五「古蹟類」)

③ 房山縣南十里。巖然而土埆。唐詩人賈島墓也。……弘治中。御史盧某。訪得于石樓村。……大學士西涯李公(李東陽)。

別樹一碑。記焉。今房山有石菴。曰賈島庵。(帝京景物略」卷八「賈島墓」)

④ 迨康熙丙子仲冬。余以公事過琉璃河。二站村南見殘碣。……篆額爲唐賈島墓云。……則果縣之東南也。……讀其碑字猶隱

隱知東陽公題咏也。視其年爲正德丙子。……今石樓去二站不遠。
〔民國十七年重修「房山縣志」卷七・羅在公「創建賈公祠記」〕
そこで、石樓すなわち郷里として、「なつかしの泉や樹木に
ひとたび別れて以來、いつしか三十年」（7 泉樹一爲別8 依稀
三十秋〔卷六「青門里の作」〕と同一表現と考えられないであ
ろうか。

⑫ 韓十八愈直是太輕薄。謂李二十六程曰。某與丞相崔大群同年
往還。直是聰明過人。李曰。何處是過人者。韓曰。共愈往還二
十餘年。不曾共說著文章。此豈不是敏慧過人也。〔劉賓客嘉
話錄〕

⑬ 絢は楚のあやまり。令狐絢は令狐楚のむすこで、かれの宰相
就任は賈島の死後である。

⑭ 「太和元年三月。（白居易有）酬裴相公興化小池見招長句。」
（汪立名「白香山年譜」）「1 似錦如霞色2 連春接夏開馬錫3 波
紅分影入4 風好帶香來度」（「全唐詩」卷二九 裴度・劉禹錫・
行式・白居易・張籍「薔薇花連句」）

⑮ 「平曾。以馮傲物。多犯忌諱。竟沒於縣曹。……乃與賈島齊
諱。爲時所忽。」〔雲谿友議〕卷中「白馬吟」

〔平曾^{長慶}年貶二〕〔唐摭言〕卷二「府元落」

⑯ 「聶公眞龔記 在靈居山。軍事判官何光遠撰。廣政四年（941）
建。」〔輿地碑記目〕四「普州碑記」

⑰ 賁の字は汲古閣本賈島集所載墓誌銘だけにある。

⑱ 「古詩初探」ではこの部分は略されている。

賈 島（荒井）

⑩ 岑仲勉氏は、この一句は唐代の人が地方官へ轉出させられる
ときの切り口上で、「令狐絢（楚のあやまり）相公に寄す」（卷
六）に「官は明快な詔勅によつて授かり、年老いて、^すきを取る
ことをまぬかれた。」（1 官蒙明敕授 2 老免把鞶鉏）とあるの
こそかれの本音だといっている。岑氏の用いたテキストは「全
唐詩」か汲古閣本であろう。四部叢刊本では、「官は高くしき
りに詔勅を授かり、人生の暮色に^すきを把りはたらく。」（1
官高頻勅授 2 老色把鞶鉏）となつてゐるから、第一句が高官の
令狐楚、第二句が不遇の賈島自身のことと解釋せねばならず、
岑氏のことばは、そのまま受けとるわけに行かない。

⑪ 入の字は、汲古閣本では日に作る。

⑫ 性和茂の三字は、汲古閣本賈島集所載墓誌銘だけにある。

⑬ 注⑬参照。

⑭ 隣の字は、賈島集では隣に作る。

⑮ 雲の字は、姚合集では霞に作る。